

国仲元島遺跡

国仲美里の壕

－ 仲地副貯水池整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 －

2018（平成 30 年）

宮古島市教育委員会



巻頭図版 1 国仲元島遺跡発掘調査全景



巻頭図版 2 国仲元島遺跡出土復元資料

序

本報告書は、仲地副貯水池整備工事に伴い実施された国仲元島遺跡、国仲美里の壕の発掘調査成果をまとめた報告書です。

国仲元島遺跡は、グスク時代の集落遺跡で、今回の発掘調査では地元で焼かれた土器の他に、島外から持ち込まれた青磁、白磁、褐釉陶器などの中国産陶磁器が多く出土しています。これらの中国産陶磁器の年代から、国仲元島遺跡は、15 世紀から 16 世紀を中心に活動を行った集落遺跡であることが分かりました。今回実施された国仲元島遺跡の発掘調査は、伊良部島における大規模な発掘調査としては初めての事例であり、伊良部島における集落の形成と変遷を考える上で大変貴重な資料がえられたといえます。

また、国仲美里の壕は、今回の工事に伴い新規に発見された戦争遺跡です。周辺の戦争遺跡や、体験談、聞き取り調査の成果などから、太平洋戦争時における旧日本軍の独立混成第 59 旅団との関係性が深い壕と考えられます。壕内からは、当時の食料である缶詰や、缶詰を加工した明り取りなどの道具が出土しており、伊良部島における太平洋戦争時の状況を考える上で有意義な調査を行うことができました。

末尾になりましたが、今回の発掘調査及び報告書作成にあたり、ご指導、ご協力を賜りました関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成 30(2018) 年

宮古島市教育委員会 教育長 宮國 博

例 言

1. 本報告書は、仲地副貯水池整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として国仲元島遺跡、国仲美里の壕の記録・保存調査の成果をまとめた報告書である。

発掘調査は、平成 29 年 1 月 18 日～3 月 24 日

資料整理・報告書作成：平成 29 年 8 月 18 日～平成 30 年 3 月 7 日までの期間で実施した。

2. 発掘調査は、宮古島市教育委員会が直営して行った。以下の業務については再委託契約を締結した国仲元島遺跡表土掘削委託業務：設備設計メンテック

国仲元島遺跡発掘調査支援業務：公益社団法人シルバー人材センター

国仲元島遺跡資料整理委託業務：株式会社アーキジオパシフィック支店

3. 発掘調査時には、沖縄県立埋蔵文化財センター山本正昭主任専門員に現場指導をいただいた。また、資料整理時には、アジア水中考古学研究所理事の田中克子氏、沖縄県立埋蔵文化財センター主任専門員の瀬戸哲也氏にご指導いただいた。記して感謝申し上げます。

4. 本報告書内における ref. は国立公文書館アジア歴史資料センターのレファレンス番号を示すものである。

5. 貝類遺体の同定については、『日本近海産貝類図鑑』（奥谷喬司編 2000 年）を使用した他、釉、素地、胎土の色調については『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局編）を使用した。

6. 伊良部国民学校沿革誌は、宮古島市史編さん室に収蔵されている資料を利用した。

7. 本報告書は、久貝弥嗣が中心となり、菱木勇一ほかの協力を得て編集を行った。報告書の執筆は、以下のとおりである。

第 2 章 第 3 節 山口直美・久貝弥嗣（文責：久貝弥嗣）。その他は、久貝弥嗣が執筆した。

8. 発掘調査で得られた遺物、実測図、写真等の資料は、宮古島市教育委員会にて保管している。

目 次

巻頭図版

序

例言

第1章 経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査体制	3
第2章 遺跡の位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	10
第3章 報告－国仲元島遺跡－	17
第1節 調査区設定	17
第2節 基本層序	18
第3節 遺構	18
第4節 遺物	24
第5節 貝類遺体	44
第4章 報告－国仲美里の壕－	50
第1節 壕1	50
第2節 壕2	56
第3節 壕3	56
第4節 壕4	57
第5章 まとめ	58

報告書抄録

第1章 経 過

第1節 調査に至る経緯

1. 平成 28(2017) 年度

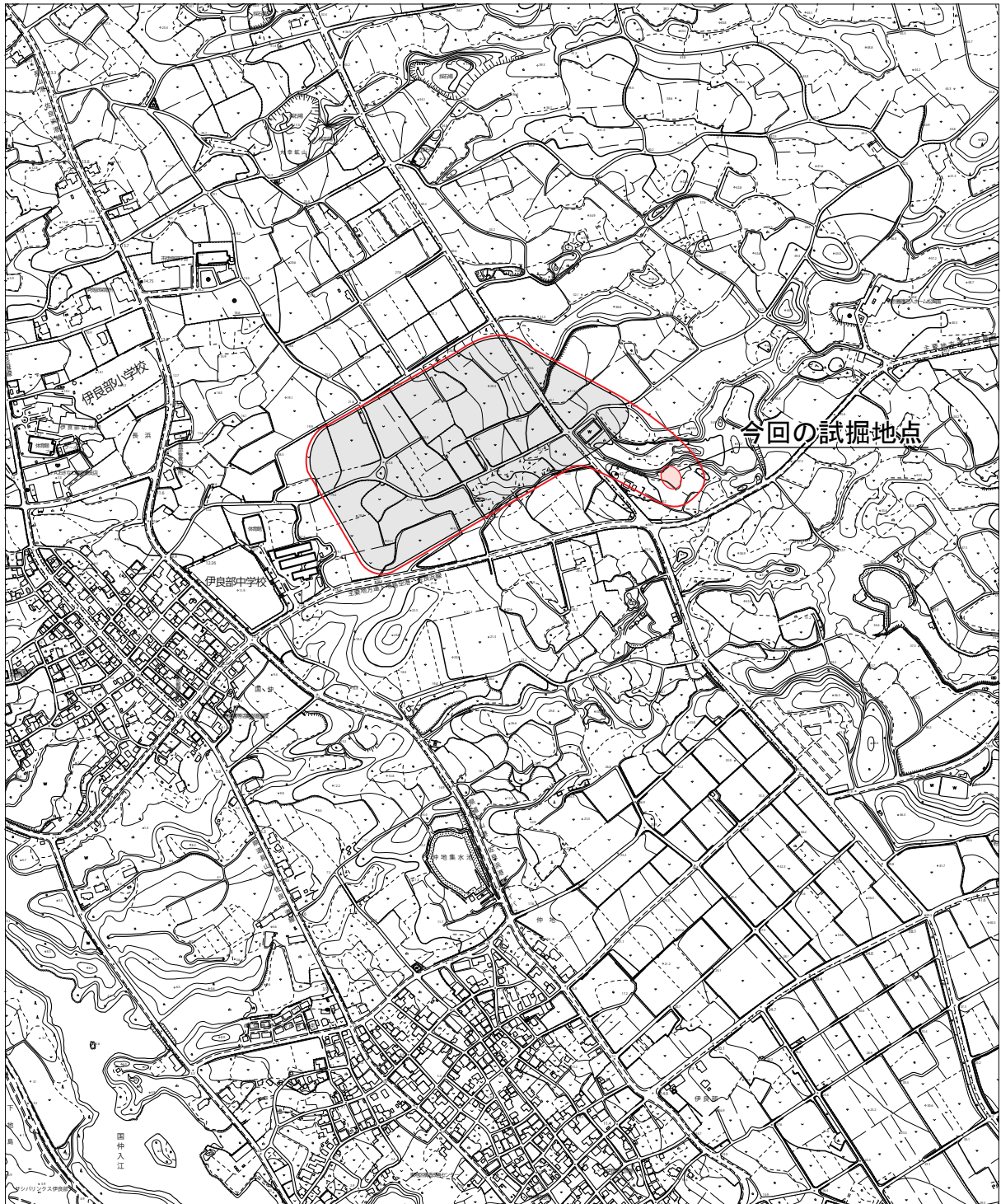
今回の発掘調査は、内閣府沖縄総合事務局宮古伊良部農業水利事業所（以下、宮古伊良部農業水利事業所）の仲地副貯水池工事に伴い実施された。工事範囲は、周知の埋蔵文化財である国仲元島遺跡に隣接しており、事前の踏査において中国産褐釉陶器などの遺物が表面採集された。そこで、宮古島市教育委員会は、平成 28 年 7 月 6 日付宮教生第 638 号にて、宮古伊良部農業水利事業所所長勝見崇あてに埋蔵文化財試掘調査の承諾について依頼を行った。この依頼に対して、土地の所有者である宮古伊良部農業水利事業所と一人の土地所有者から埋蔵文化財調査の承諾をえ、7 月 22 日～8 月 30 日期间で試掘調査等を実施し、国仲元島遺跡の範囲及び戦争遺跡の確認を行った。

その結果、国仲元島遺跡の包蔵地が、工事範囲まで及んでいることが確認され、宮古島市教育委員会は平成 28 年 9 月 8 日付宮教生第 995 号にて、国仲元島遺跡の範囲変更の報告を沖縄県教育委員会教育長へ行った（「埋蔵文化財予備調査報告（埋蔵文化財包蔵地の範囲等変更）について」）。これに対し、平成 28 年 10 月 27 日付教文第 1190 号にて沖縄県教育委員会教育長平敷昭人より宮古島市教育委員会教育長宮國博あてに回答が行われ、沖縄県宮古島市伊良部字国仲 369-3、369-4 を遺跡の包蔵地に加え、遺跡の範囲については 1,472 m²を追加した 170,072 m²を国仲元島遺跡の総面積とした。

この遺跡の範囲変更の手続きを踏まえ、工事予定地内における遺跡発掘調査に係る調整を担当者間ですめ、平成 28 年 11 月 11 日付け府宮農水第 575 号にて、埋蔵文化財発掘の通知が宮古伊良部農業水利事業所所長勝見崇より沖縄県教育委員会へ通知された。宮古島市教育委員会では、本通知を平成 28 年 11 月 22 日付宮教生第 1361 号にて沖縄県教育委員会へ進達した。これに対して沖縄県教育委員会は、平成 28 年 12 月 1 日付教文第 1379 号にて土木工事に際して国仲元島遺跡の発掘調査の必要性の旨を回答し、宮古島市教育委員会が、平成 28 年 12 月 5 日付宮教生第 1453 号にて宮古伊良部農業水利事業所所長勝見崇へ伝達を行った。これを受けて、宮古伊良部農業水利事業所と宮古島市教育委員会では、発掘調査の時期や費用についての調整を行い、平成 28 年 12 月 21 日に、国仲美里の壕と国仲元島遺跡の発掘調査を対象とした宮古伊良部農業水利事業の施行に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書を伊良部農業水利事業所所長勝見崇と宮古島市長下地敏彦と締結した。本協定書により平成 28 年度に発掘作業を実施し、平成 29 年度に資料整理、報告書作成を行うこととされた。

その後、平成 29 年 1 月 18 日に、平成 28 年度の国仲美里の壕、国仲元島遺跡の発掘作業を対象とした委託契約書が伊良部農業水利事業所所長勝見崇と宮古島市長下地敏彦と締結された。宮古島市教育委員会は、契約日より本事業について業務を着手し、委託契約書に基づき発掘調査における発掘作業員の派遣と発掘作業業務については公益社団法人宮古島市シルバー人材センターへ、発掘調査時の表土掘削業務については設備設計メンテックへ再委託を行う承認申請を平成 29 年 1 月 25 日宮教生第 1740 号にて行い、平成 29 年 1 月 27 日付府宮農水第 41 号にて承認された。宮古島市教育委員会では、これららの委託業務を締結し、発掘作業を開始した。

発掘調査は、まず調査区 A、B の表土掘削を行い、A 地区より人力による発掘作業を開始した。A 地区の発掘作業に一定のめどが立った段階で、B 地区の調査を開始した。国仲美里の壕については、伐採作業などを行った後に、測量作業等を実施し、全ての発掘調査について平成 29 年 3 月 24 日までに完了した。



- : 周知の国仲元島遺跡の包含地の範囲
- : 新たな国仲元島遺跡の包含地の範囲

第1図 国仲元島遺跡の範囲

2. 平成 29(2018) 年度

平成 29 年度は、平成 28 年度に発掘作業で出土した遺物等の資料整理と報告書作成を行った。本業務については、平成 29 年 8 月 18 日に宮古伊良部農業水利事業所所長勝見崇と宮古島市長下地敏彦との間で委託契約が締結された。事業の実施に伴い発掘調査出土遺物の資料整理業務に係る再委託承認申請を平成 29 年 9 月 15 日付宮教生第 1228-6 号にて申請し、平成 29 年 9 月 15 日付府宮農水第 671 号にて承認された。これを受け、宮古島市教育委員会では、資料整理支援業務に関する指名競争入札を行い、株式会社アーキジオパシフィック支店西井敏夫と宮古島市教育委員会教育長宮国博との間で委託契約を締結し作業を開始した。資料整理作業と並行し報告書作成も開始したが、新たな開発に伴う発掘調査があいつだため、執筆作業が当初の予定よりも遅れることとなった。そのため、宮古島市教育委員会では、平成 30 年 2 月 9 日付宮教生第 2160 号にて委託契約の変更の申請を行い平成 30 年 2 月 15 日付府宮農水第 112 号にて承認された。この変更により履行期間は平成 30 年 3 月 7 日までとされた。本変更契約ではあわせて、事業の実施金額にあわせた契約金額の変更も行われた。その後、平成 30 年 3 月 7 日までに報告書の印刷製本を行い、本事業を完了した。

第 2 節 調査体制

本事業を行った平成 28・29 年度の調査体制は以下のとおりである。

事業主体 宮古島市教育委員会 教育長 宮國 博

事業所管 生涯学習部 部 長 上地 栄作（平成 28 年度）
川満 広紀（平成 29 年度）

事業総括 生涯学習振興課 課 長 下地 悟（平成 28 年度）
生涯学習部長兼生涯学習振興課長 久貝 喜一（平成 29 年度）
文化財係 係 長 砂辺 和正（平成 28 年度）
課長補佐兼文化財係長 砂辺 和正（平成 29 年度）

事業事務 生涯学習振興課 文化財係 主 事 久貝 春陽

調査担当 生涯学習振興課 文化財係 主 事 久貝 弥嗣

調査補助 生涯学習振興課 文化財係 嘱 託 川満 広紀

臨時職員 菱木 勇一、山口 直美、川満未来、西里咲子、森谷大介

表土掘削委託業務：設備設計メンテック

発掘調査支援業務：公益社団法人宮古島市シルバー人材センター

簡易トイレ借用：三石レンタル

資料整理業務：株式会社アーキジオパシフィック支店

（資料整理作業員：草浦 昌子、平安山 恵利香、幸地ちはる、下地久美子、砂川幸子、
高橋美智代、山里智子）

報告書印刷製本：シモジ印刷



写真1 A地区着手前



写真2 A地区伐採作業風景



写真3 A地区調査区設定状況



写真4 A地区表土掘削作業風景



写真5 B地区着手前



写真6 B地区伐採作業風景



写真7 B地区重機掘削作業風景



写真8 B地区重機掘削作業風景



写真 9 A地区発掘作業風景



写真 10 B地区発掘作業風景



写真 11 B地区発掘作業風景



写真 12 簡易トイレ設置作業風景



写真 13 遺物洗浄作業風景



写真 14 遺物実測作業風景

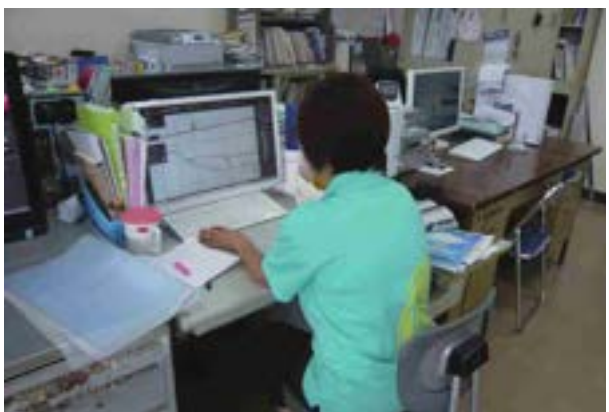


写真 15 トレース作業風景



写真 16 遺物復元作業風景

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

国仲砂川の壕の位置する伊良部島は、隣接する下地島も含めた旧伊良部町の行政単位を構成していたが、2005年10月1日に、旧平良市、旧下地町、旧上野村、旧城辺町が合併し、現在の宮古島市となった。伊良部島は池間添、前里添、佐和田、長浜、国仲、仲地、伊良部の7つの大字からなり、前2字をあわせて佐良浜（北区）、後5字をあわせて伊良部（南区）と称される。

伊良部島は、島の面積が28.3km²を有し、宮古島市内では、宮古島について2番目に面積の大きな島である。伊良部地区の人口は、5,312人（2016年9月時点『広報みやこじま』No.133より）で、宮古島市内全体の人口の1割ほどである。伊良部島は、宮古島の西に位置しており、2015年に全長3,540m（主橋部分）の伊良部大橋が開通したことにより、島への観光客も増加傾向にある。伊良部島の西には下地島が入り江を隔てて位置しており、現在2つの島は5つの橋で結ばれている。伊良部島は、島全体が琉球石灰岩からなり、島の最高標高地点は、標高88mの牧山にある。島の周辺海域の大部分に、礁嶺の発達したサンゴ礁海域が広がり、佐和田の浜は渚100選にも選定される風光明媚な海岸線である。

国仲集落は、佐和田・長浜と、伊良部・仲地の集落にはさまれるように位置しており、古くは旧伊良部国民学校がおかれ、現在では伊良部小・中学校がおかれている。国仲砂川の壕は、この国仲集落の東方400m～600mの場所に位置する小丘陵地の裾部や中腹部の琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。



第2図 遺跡位置図



第3図 調査遺跡位置図

第2節 歴史的環境 1- 国仲元島遺跡 -

現在、伊良部地区には、これまでの分布調査や発掘調査の結果から、グスク時代の遺跡が5遺跡、太平洋戦争時の戦争遺跡が7遺跡^{注1} 確認されている。本節では、国仲元島遺跡の性格を考える上で、周辺の遺跡や史跡、御嶽などの歴史的環境について整理を行っていきたい。

注1. 沖縄県立埋蔵文化財センターの戦争遺跡分布調査で報告されている5遺跡に、国仲上原の壕、国仲砂川の壕の2遺跡を加え7遺跡とした

1. 遺跡

本報告書内であつかうグスク時代は、概ね11世紀後半もしくは12世紀前半から16世紀までの年代幅を示す時期である。伊良部地区のグスク時代の遺跡としては6遺跡が報告されており（沖縄県教育委員会1983）、元島と称される旧集落跡を示す遺跡が多い。今回発掘調査を実施した国仲元島遺跡も、元島遺跡の一つである。第1章第1節でも記したように、今回の発掘調査地は、周知の国仲元島遺跡の包蔵地外であったが、青磁や土器などが表面採集され、遺跡の範囲が従来の包蔵地の範囲よりも広がることが確認された。国仲元島遺跡に関しては、沖縄県教育委員会の実施した分布調査で、土器、輸入陶磁器、青磁などが表面採集されることが確認されているが、詳細な調査が行われたことはなかった遺跡である。以下、伊良部地域の周辺の遺跡の概要について記す。

(1) 伊良部元島遺跡

伊良部元島遺跡は、現在の伊良部集落の南東約1.5kmに位置する遺跡である。現在は畑地として利用されているが、土器や中国産陶磁器の散布が確認される。表面採集では、中国産褐釉陶器、青磁、土器などが確認され概ね15～16世紀を中心とする遺跡であると推察される。

(2) 伊良部長浜遺跡

現在の長浜集落と国仲集落の間に位置する遺跡である。南蛮陶器、磁器、須恵器、土器やなどの表面採集が報告されている。分布調査以外に調査が行われていないため、その詳細は明らかではないが、南蛮陶器は中国産褐釉陶器に、須恵器はカムイヤキに比定されると考えられ、カムイヤキを伴う遺跡として注視される。

(3) 佐和田元島遺跡

佐和田元島遺跡は、現在佐和田集落の北東約1.5kmに位置する遺跡である。これまでに表面採集資料などが報告されておらず、その詳細については判然としない点が多い。

2. 歴史史料

グスク時代から近世琉球にかけての国仲集落について歴史史料の面から整理を行う。

伊良部島のことを記した最も古い歴史史料は、『朝鮮王朝実録』の「朝鮮済州島人漂流史料」である。この史料は、1477年に朝鮮済州島民が与那国島の漁民に救助され済州島へ帰島するまでの沖縄県内の島々での様子を記したものである。この中で伊良部島は、伊羅夫と記されている。そして、島では黍、粟、麦、稲を栽培していたことや、家畜として牛、鶏、猫を飼い、牛は食べるが鶏は食しないこと、酒を造っていたことなどが記されている。本史料は、15世紀後半の宮古の各島々の様子を知る上で重要な史料であるといえるが、島単位での記録であるため、伊良部島のどの村の様子を記したものであるかは不明である。

国仲村の始まりを考える上で重要な記録が『球陽』にみられる。『球陽』によれば、尚敬王25(1737、乾隆2)年に、池間島の人民を伊良部島へ移し国仲村とし、与人1人、目差1人を設けたとある。これは、古文書にみる国仲村の始まりといえる。しかし、その一方で『雍正旧記』においては、伊良部島には伊良部村と佐和田村の2つの村についての記述はみられるが、国仲村についての記述はみられない。

これに対し、家譜には 1737 年以前の国仲村の記録をみることができる。『家譜にみる宮古の役人』（城辺町教育委員会 1998）を参考に国仲村の役人についてみていくと、最も古い事例としては、南興氏 1 世明元が嘉靖年間に国仲与人であったことが記されている。嘉靖は、中国明代の第 12 代皇帝世宗が用いた元号であり、1522 年から 1566 年までの 45 年間を年代幅としている。これ以外にも 1737（乾隆 2）年以前の事例として、隆慶年間（明代・1567～1572 年）に伊安氏 6 世方里が、万暦年間（明代・1573～1619 年）に伊安氏 7 世方と白川氏 5 世恵昌が、康熙年間（1662～1722 年）に益茂氏昌盈が、雍正年間（1723～1735 年）に益茂氏昌則が国仲与人であったことがみてとれる。国仲村には、この与人以外にも目差、耕作筆者、耕作仮筆者らの役職がみてとれるが、これらはいずれも 1737（乾隆 2）年以降の年代を示しており、与人のみが 1737（乾隆 2）年以前を示している。

国仲村以外の伊良部島の村をみると伊良部村の首里大屋子の役職に、伊安氏の名前は不詳であるが嘉靖 29（1550）年に就いていたことがみてとれる。首里大屋子の役職が置かれていることから伊良部村が伊良部島における行政的な中心地であったことがみてとれる。

もう一点の歴史史料として、国絵図の視点から伊良部島の集落についてみてみたい。正保国絵図には伊良部島の唯一の村名として「くがい村」がみてとれ、これは元禄国絵図、天保国絵図でも同様である。絵図の位置から、現在の集落や元島遺跡との比較を行うことは推測を伴うが、伊良部村と国仲村のどちらに比定されるかは判然としない。なお、これらの絵図には、伊良部島の海の玄関口は現在の長山港一帯であったことがみてとれそこから海岸線にそって道が設けられ、現在の佐和田集落あたりを終点としている。『雍正日記』の段階においては、伊良部島のもう一つの中心的な集落として佐和田村が位置づけられていたことがみてとれ、国絵図には村として記されていないものの佐和田まで道が伸びている状況は村の存在をうかがわせている。

以上の歴史史料から国仲村について考えると、国仲村の始まりの一つは乾隆 2（1732）年にあったといえる。しかし、家譜の記録を見る限りでは、それ以前にもその母体となる村が存在していた可能性が考えられる。これは、今回の国仲元島の発掘調査でえられた集落の中心年代が 15～16 世紀に位置づけられることから十分可能性があるといえる。

3. 御嶽

(1) 国仲御嶽（異称：オコオタキ、ヨーコイ）

字国仲集落の東方。伊良部中学校の東に隣接した大きな森の中にある。この森は、植物群落として県指定の文化財になっており、種々の植物が密生し昼なお暗い森になっている。比屋地御嶽の神アカラトモガネを祀ってあるということだが、古老やツカサンマ達の話によれば、比屋地（マキともいう）の神は男神であるが、オコオタキの神は女神で、マキの神とは夫婦神である。マキの神はカタカシラを結び、時々オコオタキの神のところに訪ねてくる。オコオタキの神は美しい女神で、豊かな黒髪を頭の後ろに大きく束ねて結っているのみたという人もおり、御嶽の神のツカサンマたちも、このような老婆をよく夢にみるということである。

昔は、島中の御嶽には神殿や鳥居などはなく、大抵は、砂を盛り、これに線香を立てて祈願していたが、香炉を置くようになり、ツカサンマたちのために雨露をしのぐためのカヤブキ屋をつくったり、石積み瓦葺き、石積みコンクリートスラブ屋根、鉄筋コンクリートに変わった。国仲御嶽は昭和 32 年頃に石積コンクリートスラブ建てができ、昭和 61 年 6 月に現在の鉄筋コンクリート平屋建て 14 坪の神殿ができた。

第3節 歴史的環境 2- 国仲美里の壕 -

1. 伊良部地区における旧日本軍の展開

沖縄戦時、伊良部地区においては、独立混成第59旅団、野戦重砲兵第1連隊第1大隊第1中隊、山砲兵第28連隊第1大隊第3中隊などの部隊が配備されていたことが確認される。以下、今回報告を行う国仲砂川の壕の位置する国仲一帯の各部隊の配備状況などについて整理を行っていきたい。

(1) 独立混成第59旅団

沖縄戦時、国仲集落に所在した伊良部国民学校には、独立混成第59旅団（通称：碧部隊。以下、第59旅団）が、昭和19年9月14日より駐屯している（沿革誌より）。第59旅団は、昭和19年8月15日満州公主嶺で編成され、9月14日に伊良部島に到着している（ref. C12122494800）。第59旅団は、多賀哲四郎少将を旅団長とし、司令部136人、独立歩兵第393大隊601人、第394大隊592人、第395大隊600人、第396大隊602人、旅団砲兵隊371人、旅団工兵隊254人、旅団通信隊195人の総数3,351人から編成される（ref. C11110031400）^{（注1）}。第59旅団は上陸早々、伊良部国民学校校舎の職員室を除く17教室を旅団本部と通信隊の兵舎に転用している。移駐した部隊は、村内の要所に配備されて、村内の林には幕舎を設営し、10月頃から全島に渡っての陣地構築や弾薬庫、食糧庫の壕掘り作業が始まった。しかし、昭和20年6月2日に、兵力の分散を避けるため、平良への移動が下令されている。平良では添道地区に戦闘指令所を開設して狩俣方面までの守備にあたっている。

後述する付録にもあるように、沿革誌には、第59旅団が伊良部国民学校に駐屯している間に、講和や軍慰安の学芸会などを開催していることがみてとれる。しかし、昭和20年3月27日の空襲を受け、第59旅団の一部は、国民学校から移動し、翌28日には第59旅団の全てが国民学校から移動している。4月1日以降は、連日のように伊良部島が空襲を受けており、国民学校も4月3日には機銃掃射を受け、大きな被害を受けている。国民学校から移動した第59旅団は、ウルカー帯の森に移動したとされる（体験談より）。ウルカとは、現在の国仲に所在する小字の砂川に比定されるもので、今回壕が確認された小字と同一地域である。

(2) 野戦重砲兵第1連隊第1大隊第1中隊

野戦重砲兵第1連隊第1大隊は、昭和19年7月に宮古島に上陸し、当初は西城国民学校に本部を置いている。第1大隊の第1中隊は三上鎮男中尉を中隊長とし、伊良部島に配備された際には、第59旅団の隷下にはいり、96式15榴弾砲を2門有していたとされる（ref. C11110010000）^{（注2）}。第1中隊は、第59旅団が宮古島へ移動した後も、伊良部島にとどまったとされ、沿革誌では昭和20年7月14日に、佐和田の高等科児童が、三上隊の長山陣地構築作業に協力^{（注3）}、15日には仲地の高等科児童も長山陣地の構築作業に従事させられていたことが記されている。また戦史資料（ref. C11110010000）にも、8月上旬まで壕の構築を予定していたことが記載されていることから、同中隊は宮古島へ移動することがなかったと考えられる。

三上隊の構築していた長山の陣地壕とは、「牧山陣地壕」と考えられる。本壕は、牧山の急崖部に砲口を設け、96式15榴弾砲を壕内に設置して平良港一帯の守備の援護を目的としていたと推察されている。

(3) 山砲兵第28連隊第1大隊第3中隊

山砲兵第28連隊第1大隊第3中隊は、河村恒中尉を中隊長とし、伊良部地区隊として派遣され、第59旅団の隷下にはいっている（ref. C11110237800）。山砲兵第28連隊は、昭和19年8月12日に宮古島に上陸している。第3中隊がいつの時期に伊良部島へ渡ったのかは不明であるが、昭和20年6月上旬には伊良

部地区隊の指揮を脱し、山砲兵第 28 連隊の連隊長の隷下に復帰していることが分かる。第 3 中隊が、伊良部島のどこで、どのような活動をしていたのかを伺い知ることのできる資料は確認されていない。

＜注釈＞

注 1：各部隊の履歴 (ref.C12122494800) を確認すると、独立歩兵第 395 大隊のみが、伊良部島への移動が確認されないため、同隊は伊良部島へ配備されなかったものと考えられる。

注 2：第 1 中隊は榴弾砲を 3 門有していたが、平良町南岸に 1 門を残していったため、伊良部島へは 2 門を運び入れたと考えられる。

注 3：沿革誌には、「宇佐和田ノ高等科児童ハ三上隊長，山陣地構築作業協力ヲナス」と記されているが、読点が本来の意味での読点であるのか不明瞭であったため、本報告書では、「…(中略) 三上隊長山陣地 (中略)…」と読むものと考えた。

2. 周辺の戦争遺跡及び関連記念碑

(1) 伊良部島の忠魂碑 (図版 1)

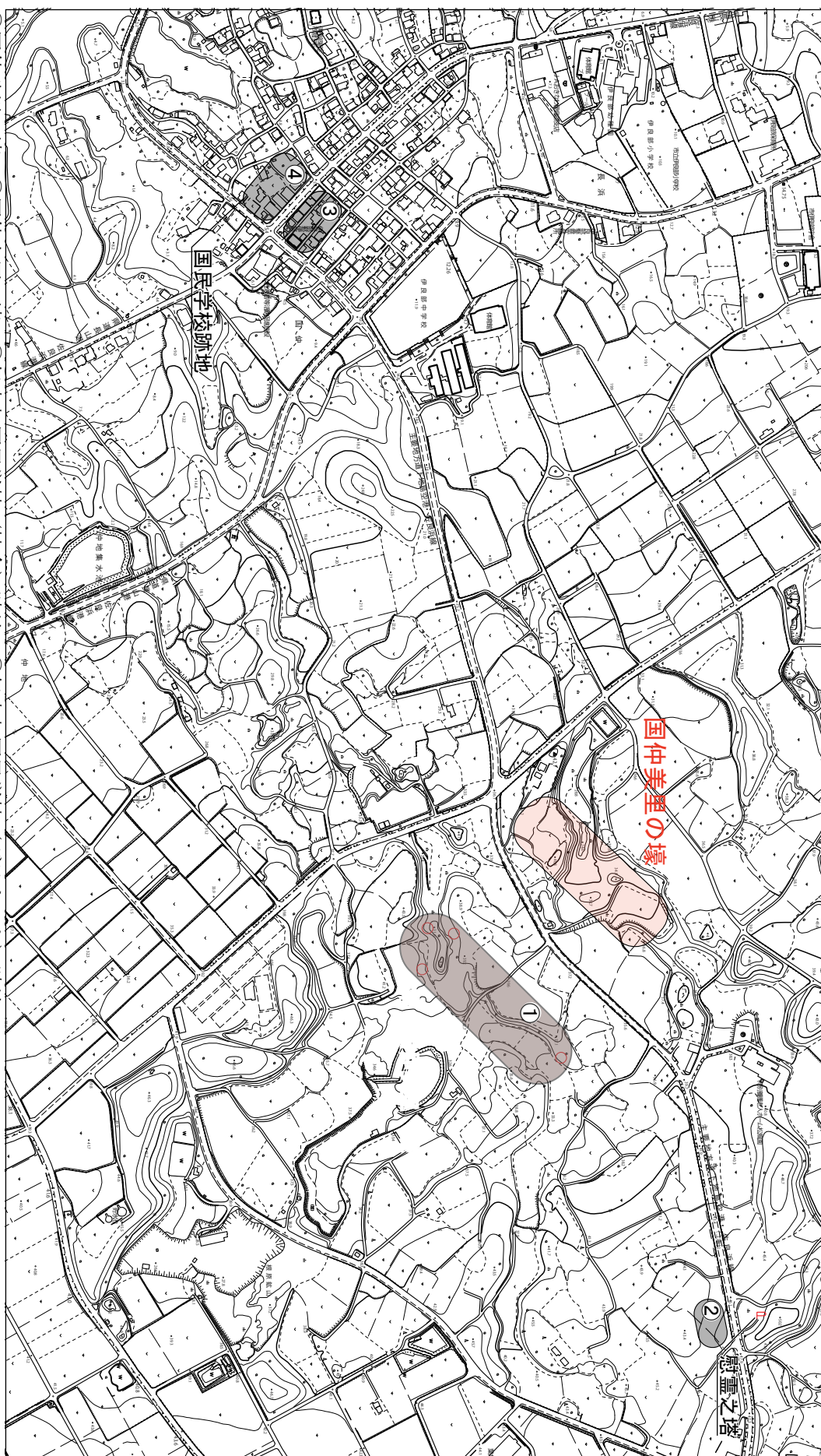
忠魂碑は、戊辰戦争 (1868 年) 以後、各地に建立された招魂社 (のち護国神社) ひいては靖国神社に結びつく、天皇のために宣した英霊を祀る記念碑である。1904～05 年の日露戦争以後、全国各地で建立されるようになったが、宮古には伊良部のほかに、旧平良町 (1924 年建立)、旧城辺村 (1927 年建立)、旧下地村 (1932 年建立) の 4 ヶ所で建立された。いずれも当時の町村当局の音頭で一般に寄附を募り建立されたようである。15 年戦争を通じて陸軍記念日 (3 月 10 日)、海軍記念日 (5 月 27 日)、あるいは大詔戴日 (毎月 8 日) など、各種記念日には在郷軍人や青年団を中心に慰霊祭ならびに戦意高揚の各種催しがなされた。その際、児童生徒も参拝させられている。

伊良部島の忠魂碑は 1914 年に建立されており、宮古島市内でもっと古く、県内においても 1912 年に建立された旧佐敷村の忠魂碑について 2 番目に古い忠魂碑である。碑銘の揮毫者名は明記されていないが、当時の村長 (国仲寛徒) であろうとされている。



第 4 図 宮古島地区防禦配備図 (瀬名波 1975 年)

①国仲砂川の壕 ②国仲上原の壕 ③伊良部国民学校（校舎）跡地 ④伊良部国民学校（グラウンド）跡地
第5図 遺跡位置図



(2) 牧山陣地壕

伊良部島の最高地点である牧山（標高 88m）頂上近くの、標高 75m 付近に設置された陣地壕で、牧山展望台への遊歩道沿いに位置する。砲口からは、宮古島北部の西海岸を一望でき、平良港の防衛のために設置したと考えられる。本壕には、96 式 15 糎榴弾砲が格納、設置され、野戦重砲兵第 1 連隊第 1 大隊第 1 中隊に関連する壕と考えられる。

(3) 国仲上原の壕（図版 3、4）

本壕は、忠魂碑の道向かいに位置し、ほ場整備工事に伴い、2012 年 10 月に新発見された壕である。工事により壕口部分の天井は崩落していたが、残存する壕の幅は約 3m、高さ 2.8m、奥行き約 8.5m であった。比較的内部の広い壕である。人為的に掘り込んでおり、旧日本軍によって構築されたものと考えられ、特に近隣に駐屯していた独立混成第 59 旅団との関係性が深い壕と考えられる。

(4) 国仲砂川の壕

本遺跡は、平成 28 年に宮古島市農地整備課の実施する圃場整備工事に伴い新規に発見された遺跡で、平成 28 年度に発掘調査と報告書作成が行われている。本遺跡は、4 基の壕で構成されており、内 3 基はフラスコ状の壕口を形成しており、周辺の聞き取り調査や戦史資料から 96 式 15 糎榴弾砲を格納していたことが推察されている。本遺跡は、伊良部国民学校に本部を置いていた独立混成第 59 旅団の移動地と重なることから同部隊に関連する壕の一部と推察される。



写真 17 牧山陣地壕（壕口部分）



写真 18 忠魂碑

＊右は裏に記された忠魂碑の建立年月日



写真 19 慰霊之碑



写真 20 国仲上原の壕・近景



写真 21 国仲上原の壕・壕内部



写真 22 国仲砂川の壕（壕 1 の壕口部分）



写真 23 国仲砂川の壕（壕 1 の壕口内部）

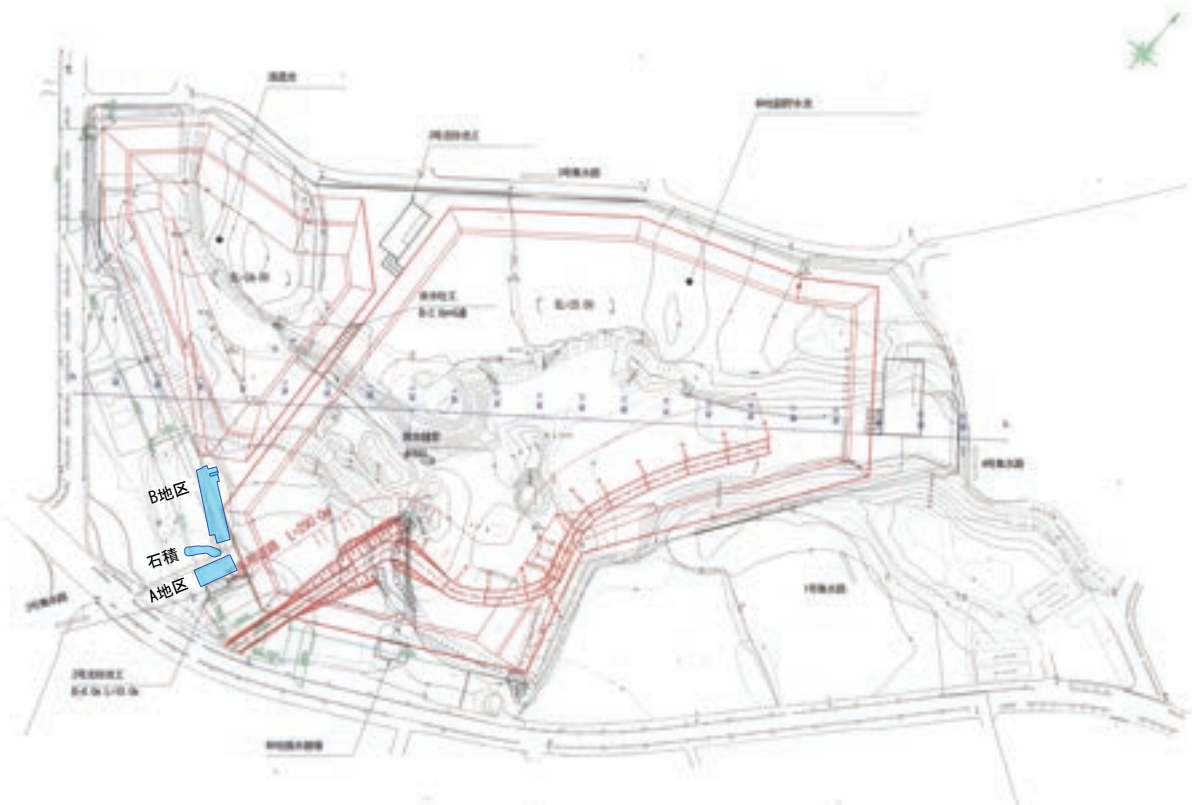
第3章 報告－国仲元島遺跡－

第1節 調査区設定

国仲元島遺跡の発掘調査は、事前の試掘調査や表面採集の成果を踏まえ、開発工事予定地内の宮古島市伊良部国仲美里 369-3、369-4 番地を対象として行い、それぞれの番地で調査区の設定を行った。国仲美里 369-3 番地内の調査区を A 地区とし、ほぼ南北方向に 7.5 m × 18.5 m（調査面積 138.75 m²）の長方形形の調査区を設定した。国仲美里 369-4 番地の調査区は B 地区とし、北西－南東を軸に約 8 m × 37.5 m（300 m²）での調査区を設定した。また、A 地区と B 地区の間には、番地の境界を示すと考えられる幅約 2m、高さ 1.5m ほどの石積があり、その石積に多くの中国産褐釉陶器や、土器、貝類などが含まれていたため、これらの資料についても表面採集を行った。

発掘調査は、攪乱の及んでいる耕作土の部分までは重機で掘削を行い、その後発掘調査作業員による手掘りの掘削作業を行った。調査は、まず A 地区より発掘作業を開始した。A 地区においては、その大部分が攪乱を受けている状況が確認できた時点で、遺構検出のための平面精査作業と並行して、B 地区の発掘調査にも開始した。B 地区においては、北側部分で、石積遺構や包含層が良好な状態で確認されたため、調査区を拡張して、その性格や広がりについて確認作業を実施した。また、B 地区の作業と並行して後述する国仲美里の壕の測量作業なども行った。

なお、資料整理作業の段階において、調査時における遺物の取り上げ表記と遺物への注記は以下のとおりに整理を行った。両地区の共通した読み替えとして「清掃中」の表記はⅠ層とし、「包含層」はⅡ層とした。「B 地区 2」は石積部分表面採取、「B 地区北包含層」は B 地区Ⅱ層、「B 地区石積内」は B 地区 2 層石積とした。



第6図 調査区位置図

第2節 基本層序

A地区・B地区は近接しており、同じ堆積層で捉えることができる。調査区A・Bはともに、基盤の琉球石灰岩までの堆積が浅く、調査前には畑地として利用されていることもあり、両調査区ともプライマリーな遺物包含層が残されている範囲は限られていた。A地区においては現在の表土より約50 cm下、B地区では約30 cmで基盤の琉球石灰岩にたつする。しかし、調査区Bの東端部分では、良好な状態で遺物包含層が残されており、石積遺構も確認された。以下に、A・B両地区の基本層序について記す。

第1層：現在の表土層と畑地時に耕作土である。

第2層：グスク時代の遺物包含層。暗褐色シルト。炭化物等を多く含む。青磁、中国産褐釉陶器、土器などの遺物を包含する。調査区Bの北側部分において検出され、石積遺構は第2層に帰属する遺構である。

第3層：地山。マージ層

第4層：基盤の琉球石灰岩。調査区Bにおいては、ほぼ全面で第4層が検出される。



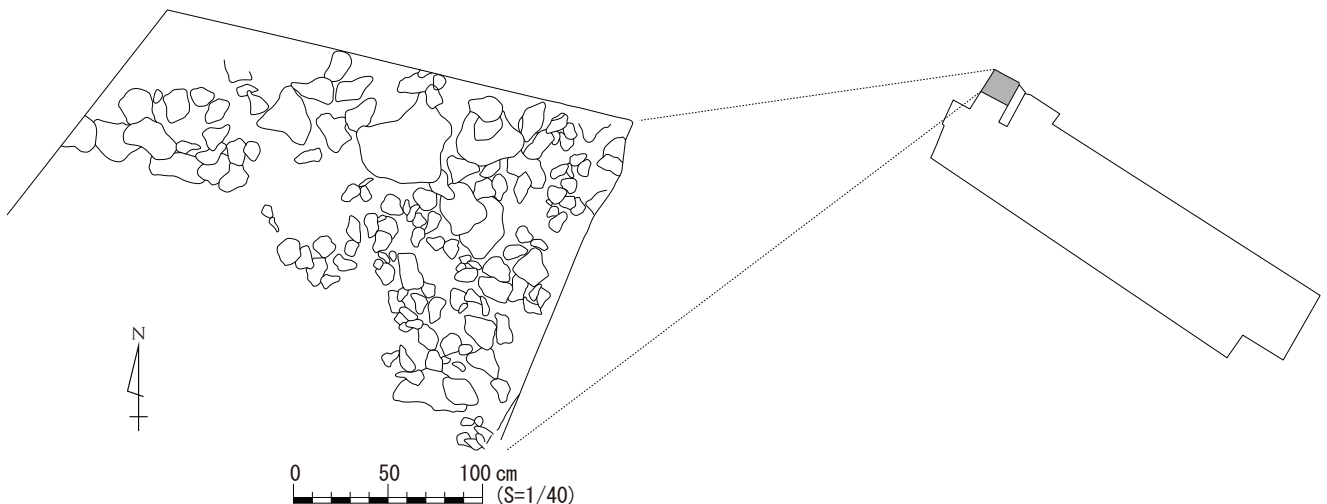
写真24 A地区の基本土層断面



写真25 B地区の基本土層断面

第3節 遺構

遺構が検出されたのは、B地区の北側部分における石積遺構のみである。石積遺構は、20～30 cm大の琉球石灰岩を多く使用するが、40～60 cm大の比較的大きな琉球石灰岩も使用されている。これらの琉球石灰岩に加工は見られず、自然の石を野面に積んでいる。石積の高さは、約60 cmほど積まれ、第2層より積まれていることから、グスク時代の石積である。石積内からは、土器、中国産褐釉陶器、青磁、貝類遺体などの遺物が出土する。石積の検出された調査区Bの北側は、斜面地下部にあたり、石積の部分的な検出であったため、その用途などについては判然としない。



第7図 石積遺構平面図 (S=1/40)



写真 26 A地区完掘状況（北より）



写真 27 A地区完掘状況（南より）



写真 28 B地区完掘状況（北西より）



写真 29 B地区完掘状況（南東より）



写真 30 B地区石積遺構検出状況（断面）



写真 31 B地区石積遺構検出状況（平面）



写真 32 B地区石積遺構（平面）



写真 33 B地区石積遺構（土層面）

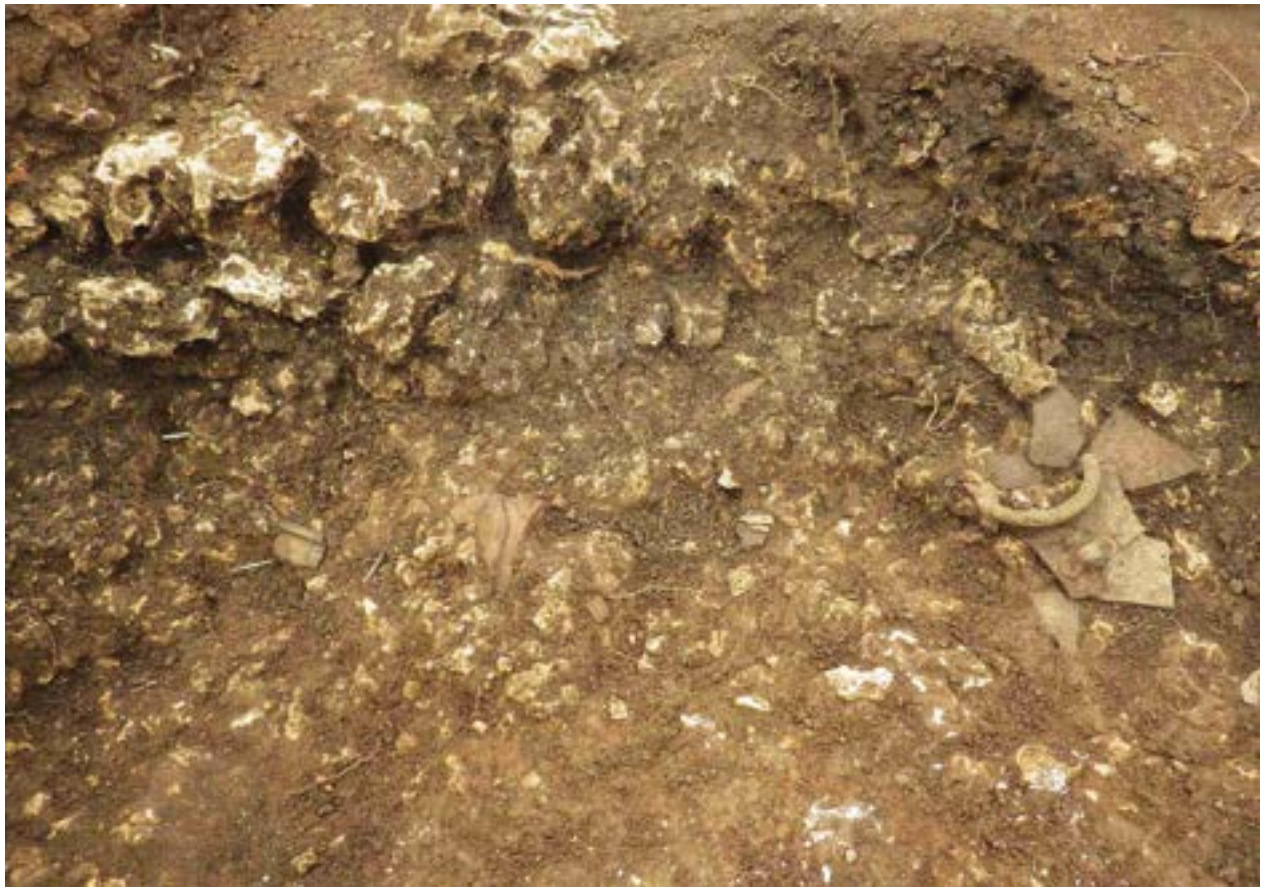


写真 34 B地区遺物出土状況（石積部分より）



写真 35 B地区遺物出土状況（石積部分より）



写真 36 B地区遺物出土状況（石積部分より）



写真 37 B地区遺物出土状況（石積部分より）



写真 38 A 地区と B 地区の間の石積



写真 39 A 地区と B 地区の間の石積（遺物採集作業風景）

第4節 遺物

1. 遺物の分類

国仲元島遺跡からは、15世紀から16世紀にかけての遺物が多く出土している。中国産陶磁器として、白磁、青磁、褐釉陶器、青花、黒釉陶器が確認される。また、宮古島で焼かれた土器や食料残滓としての貝類遺体なども数多く出土している。以下に、各遺物の分類と集計について記す。

A. 白磁

白磁は、総数53点とその出土点数は少ない。器種としては碗のみが出土する。口縁部や底部に特徴をもつ種類が多いため、それらの部位については分類を行い、明確な特徴を有する胴部についても分類を行ったが、それ以外の資料については胴部として一括して集計を行った。白磁は出土点数が少ないものの浦口窯系白磁やビロースクⅠ・Ⅱ類などの13世紀後半から14世紀にかけてのが出土しており、青磁よりも古相の様相を示し、国仲元島遺跡の活動の始まりを考える上では重要な要素を示している。

(1) 碗

①浦口窯白磁 浦口窯白磁は、福建省閩江流域の浦口窯で生産された白磁の一群とした。これまでの窯跡などの調査により今帰仁タイプ白磁碗は浦口窯で生産されたと考えられている。従来今帰仁タイプ白磁碗として分類されていた白磁の一群であり、高台の造りとして、高台がハの字型の外側に開き、外底の高台際を篋で削って三角状に凹めて仕上げる特徴に共通性はみられるものの、器壁の厚さは内底を篋状の工具で一条削点や、蛇の目釉剥ぎの方法などに差異もみられる。しかし、これらの製品は浦口窯の生産品としても確認されていることからより広い分類概念として浦口窯白磁とした。本遺跡からは底部が5点出土している。

②ビロースクⅠ類 ビロースクタイプの白磁は金武正紀氏によってⅠ～Ⅲ類に分類されており、本報告書内でも其の分類概念に従う。ビロースクⅠ類は、基本的に内湾型であるが、口唇内端を丸くし、口唇直下の外面を指でおさえてろくろを回し、口唇外端を尖らせている。内面上部には陰圏線を一本めぐらし、下部には櫛描き文のあるものもみられる。本遺跡からは口縁部が1点と胴部1点が出土している。

③ビロースクⅡ類 ビロースクⅡ類は、内湾する碗で、口唇は丸みをもち、口唇内端は内向し稜を示すものが多い。本遺跡からは口縁部が6点出土している。

④ビロースクⅢ類 ビロースクⅢ類は、口縁部が外反し、内底が平坦で、その印花を施したものがほとんどである。本遺跡からは口縁部2点、底部1点が出土している。

B. 青磁

青磁は総数553点出土している。出土点数としては、中国産褐釉陶器よりも少ないが、個体数で考えるならば青磁が中国産陶磁器の主体をなしている。器種は碗が主体をなし、皿、盤、杯、壺の器種が確認される。分類としては主に口縁形態や文様の要素によって分類を行い、概ね外間遺跡の分類と同じ基準で分類を行った。底部についても細分可能であると考えるが、本報告書内では一括して集計を行った。

碗では、玉縁口縁が最も多く、無文外反、無文直口、細蓮弁文とつづき、雷文帯、蓮弁文なども少量ながら出土している。2層にかぎってみるならば、蓮弁文、細蓮弁文の出土はみられず、玉縁口縁碗が主体を示している。皿は稜花皿、外反皿、蓮弁文、口折皿が確認できる。外反皿が最も多く、稜花皿がそれにつづく出土量をなしているが、2層からの出土は少ない。盤は、口縁の形態によって外反、鐔縁、稜花、直口、口折に分類を行い、鐔縁の盤が主体をなしている。杯は、口縁部の形態から八角杯に分類され6点の出土が確認できる。また、壺と考えられる口縁部も1点出土している。

C. 中国産褐釉陶器

中国産褐釉陶器は、総数 2227 点が出土しており、本遺跡で最も出土量の多い種類である。これは、中国産褐釉陶器が他の陶磁器に比べ法量が多いことが要因と考えられ、口縁部の出土点数を比較した場合、青磁と同程度がやや少ない。器種としては、壺が圧倒的な割合を占めており、小壺と鉢もごく少量確認できる。中国産褐釉陶器の分類は、外間遺跡の分類に基づいた。

(1) 壺

壺は口縁形態によって大きく 3 つに分類を行った。

① **I 類** 胴部から口縁部へ明瞭な稜を有して立ち上がる頸部をもつ壺。国仲元島遺跡からは I a 類のみが出土している。I a 類は、口縁形態が略「フ」の字状を呈し、灰色の素地で黒褐色の粒子を含む。

② **II 類** 口縁から胴部にかけて緩やかに移行し、頸部をもたない壺。口縁形態によって細分される。

II a 類：口縁部を外側に折り曲げて肥厚させ玉縁状、略「フ」の字状を呈するなどのバリエーションを有する。素地は赤褐色をなすものが多く、黒釉、褐色釉などを施釉する。

II b 類：口縁部が略方形状を呈する。素地は暗灰黄色を呈するものが多く、釉は光沢のある青灰色。

(2) **鉢** 鉢は、口縁の断面形態が「て」の字状をなし、新里村遺跡では I 類に分類される。

(3) **小壺** 茶入れとも称される。器壁は非常に薄く、素地は赤褐色を呈し精錬される。

D. 青花

青花は総数 7 点出土し、A 地区 1 層より 1 点、B 地区表面採集で 2 点、2 層より 3 点、石積からの表面採集で 1 点の内訳となる。内底に玉取獅子文を描く外反皿が 2 層より出土している。しかし、大部分が小破片であり分類、同定にはいたらなかった。

E. 黒釉陶器

天目とも称される種類である。黒釉陶器は総数 2 点が出土し、いずれも B 地区 2 層の石積内からの出土である（胴部 1 点、底部 1 点）。

F. 土器

土器は総数 1733 点が出土し、中国産褐釉陶器について多い出土量を示す。しかしながら、出土遺物の大部分は胴部であり、器種の分かる口縁部などの出土点数は少なかった。器種としては、壺、鍋、鉢の 3 種が確認された。壺の口縁部は外反もしくは直口しており、総数 8 点の口縁部が確認される。鍋としたものは、口縁部は確認されなかったものの、外耳を有する野城式土器をモデルとした器形が想定される資料を鍋として分類した。鉢は、口縁部が直行し、口縁を最大径として底部にむかって緩やかに狭まる器形とした。

G. 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器は総数 13 点が出土し、全て B 地区の表面採集と I 層からの出土で、2 層からは出土しない。器種が確認できたのは壺形の口縁部の 1 点のみであった。

H. 沖縄産無釉陶器

沖縄産無釉陶器は総数 25 点が出土しているが、いずれも A 地区表面採集と 1 層、B 地区の表面採集と 1 層からのみの出土で 2 層からは出土しない。器種として確認できるものは播鉢の胴部 1 点のみである。

Ij. 鞆の羽口

鞆の羽口が石積部分より 1 点表面採集されている。

第1表 白磁集計表

器種 部位 種類		碗							不明		総計
		口縁部			胴部		底部		胴部	底部	
		スビ クロ Ⅰ	スビ クロ Ⅱ	スビ クロ Ⅲ	内 描 面 櫛	無 文	スビ クロ Ⅲ	タ 今 イ 帰 ブ 仁			
地区	層										
A地区	表採								1		1
B地区	表採		1				1	2	17		21
	1層								4	1	5
	石積部分表採		3	2	1	3		1	4		14
	2層（北側）	1	1					1	4		7
	2層（石積内）		1					1	3		5
総計		1	6	2	1	3	1	5	33	1	53

中褐

第2表 中国産褐釉陶器集計表

器種 部位 種類 地区 層		壺						小壺		鉢	不明		総計
		口縁部				胴部 (耳)	底部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	
		I a	II a	II b	不明								
A 地区	表採	1				2	3				52		58
	1層								1	1	123	7	132
	2層										24		24
B 地区	表採	5	7		1	6	6			1	592	14	632
	1層		2			3					125		130
	石積部分表採	11	20	2		10	9	5		3	699	67	826
	2層					1	2				6		9
	2層（北側）	5	7		1	5	19			1	361		399
	2層（石積内）	1	6			1						9	17
総計		23	42	2	2	28	39	5	1	6	1982	97	2227

第3表 土器集計表

器種 部位 種類 地区 層		壺		鍋			鉢	不明				総計
		口 縁 部	胴 部	外 耳	胴 部	底 部	口 縁 部	口 縁 部	(外 耳 部)	胴 部	底 部	
A地区	表採									25	2	27
	1層									61	1	62
	2層									44		44
B地区	表採									287	6	293
	1層							1		106	1	108
	石積部分表採	5	7		3	2		3		698	49	767
	2層（北側）	2							1	368	4	375
	2層（石積内）	1		4			1			49	2	57
総計		8	7	4	3	2	1	4	1	1638	65	1733

第4表 青磁集計表

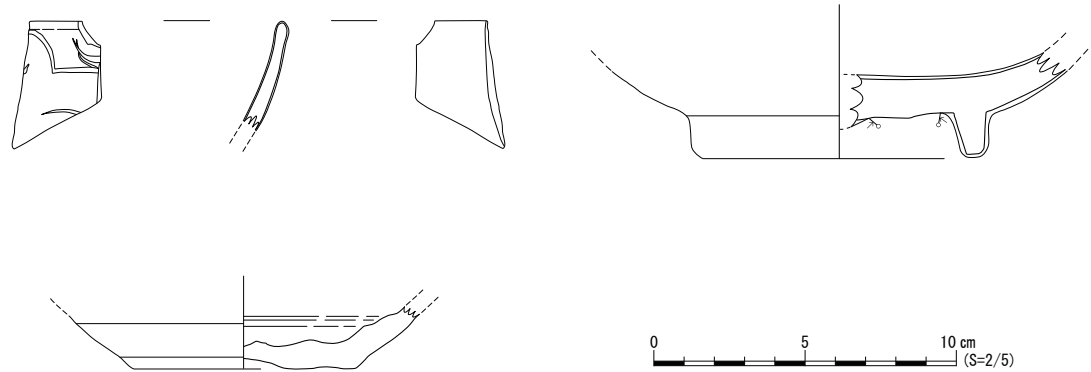
器種 部位		碗										皿						盤						杯		壺		不明		總計																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
		口縁部								底口部		胴部		底部		口縁部				底部		口縁部		八角杯		胴部		口縁部			鐔縁																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
地区	層	玉縁口縁	無文外反	細蓮弁	蓮弁文	直口（有文）	直口（無文）	雷文（手）	雷文（型）	玉縁口縁	蓮弁文	底口部	胴部	口縁部				口部	底口部	胴部		底部				口縁部				蓮弁文		陵花		直口		口折		底部																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
		2	3			1									2	1																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															

2. A 地区

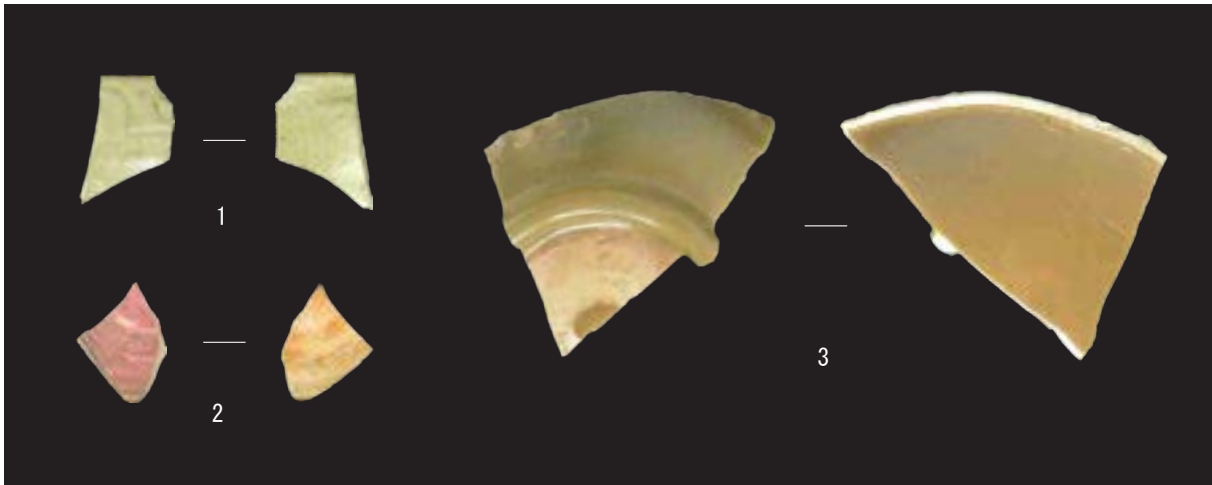
A 地区は、第 2 層はほとんど残っていない状況であったため、B 地区に比べ出土遺物の量は圧倒的に少ない。出土遺物としては、中国産褐釉陶器が 214 点、土器が 133 点、青磁が 88 点と多く出土しており、調査区 B の第 2 層とほぼ同様の年代観の遺物で組成される。以下に、代表的な資料を図化した。

第 5 表 観察表〔青磁・中国産褐釉陶器（A 地区・Ⅰ層・Ⅱ層）〕

図番号		種類	器種	部位	観察	出土層
第8図・図版1	1	青磁	碗	口縁部	直口口縁。篋彫りで口縁部に雷文、胴部に蓮弁を描く。素地は2.5Y8/3浅黄を呈し、微細な間隙を有する。釉は発色のにぶい緑色。	2層
	2	青磁	碗	底部	底径9.4cm。内底に印花を施すが不明瞭。外底は蛇の目釉剥ぎを行う。釉は厚く2mmにもおよびオリーブ色を呈し発色良い。素地は2.5Y灰白で間隙有。	2層
	3	中国産褐釉陶器	小壺	底部	底径7.2cm。内面は轆轤痕が明瞭に残り褐色の釉を施釉。外底と外面は露胎。素地は2.5Y6/2灰黄で微細な褐色粒子を僅かに含む。	1層



第 8 図 青磁・中国産褐釉陶器（A 地区・Ⅰ層・Ⅱ層）



図版 1 青磁・中国産褐釉陶器（A 地区、Ⅰ層・Ⅱ層（S ≒ 2/5））

2. B 地区

B 地区からは、第 2 層を中心に多くの陶磁器類、土器などが出土している。第 2 層における主要な出土遺物の内訳としては、白磁 38 点、青磁 266 点、中国産褐釉陶器 1187 点、土器 833 点となり、出土量が少ないが黒釉陶器 2 点、青花 3 点の出土が確認できる。

これらの遺物から第 2 層の年代観を考えると、13 世紀後半～14 世紀前半・中頃の浦口窯白磁、白磁ビロースクⅠ・Ⅱ類がみてとれる。しかし、これらの遺物は各 1 点と非常に少ない。また、後続する 14 世紀後半頃の白磁ビロースクⅢ類の出土は石積部分からの出土は確認できるものの、第 2 層からの出土は確認できない。青磁についてもこれらの時期に相当する資料の出土は非常に少ないことから、当該期は国仲元島遺跡の萌芽期といえるが、それほど活動が活発ではなかったと考えられる。青磁の最も出土量が多いのは、玉縁口縁碗、無文直口碗となり 15 世紀中頃から 16 世紀前半頃に位置づけられ、当該期が国仲元島遺跡の最盛期であったと考えられる。本時期については青磁が中国産陶磁器の主体となっており、白磁、青花の出土量は非常に少ない。3 点出土する青花の中で、年代を明らかにできた資料として内底に玉取獅子を描いた皿が 1 点出土しており、前述した青磁の最盛期となる 15 世紀後半～16 世紀前半に位置づけられる資料である。

第 6 表 B 地区出土遺物観察表 1

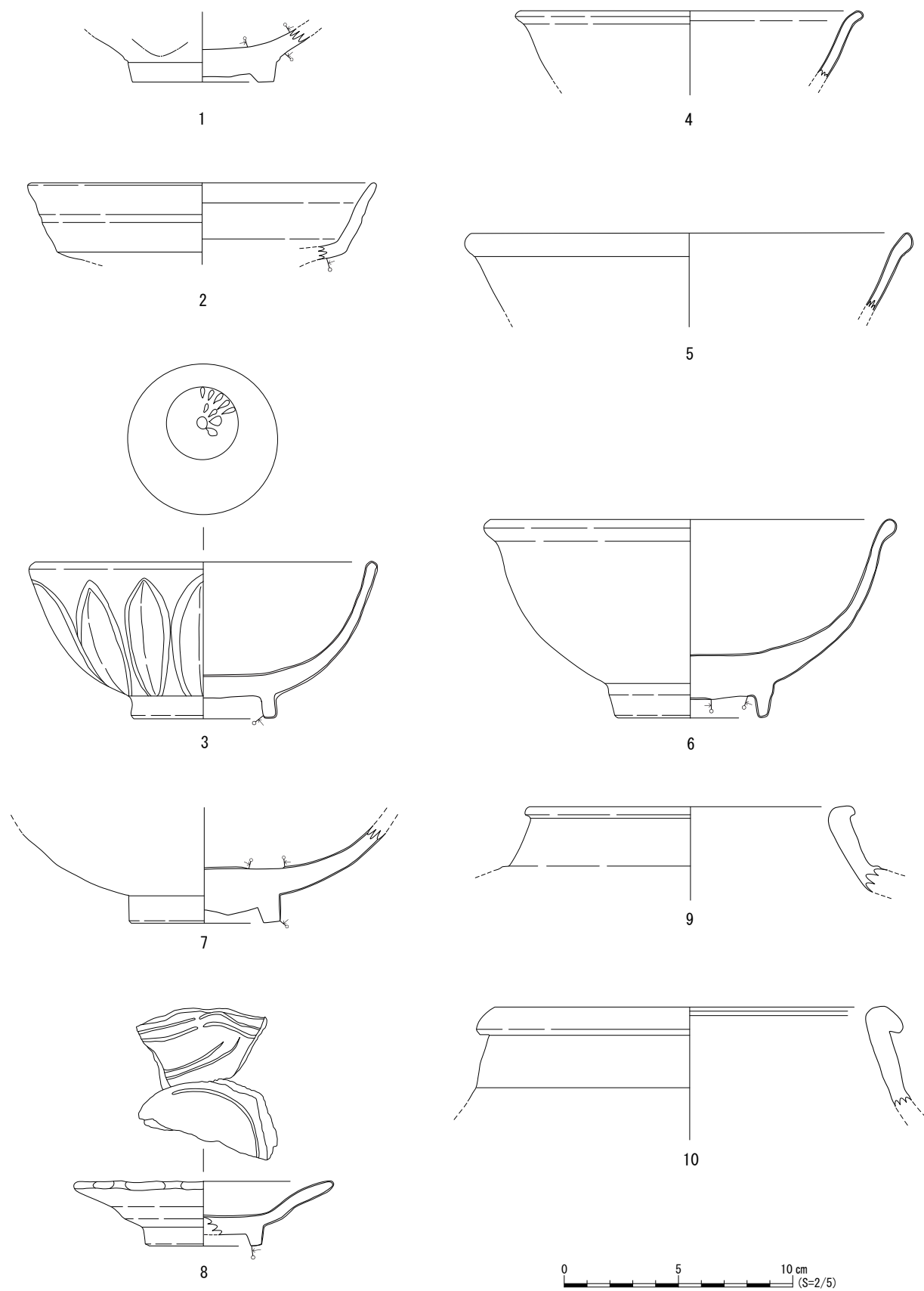
図番号	種類	器種	部位	観察	出土層
第 9 図・図版 2、3	白磁	碗	底部	底径 6.2cm。外面は高台脇から露胎し、内底は蛇の目釉剥ぎ。外底は中央部をヘソ削りする。素地は 2.5Y8/4 浅黄。釉は 2.5Y7/2 灰黄で貫入有り。	2 層
		皿	口～腰部	口径 14.8cm。口縁は直口し腰折れの器形を呈す。外面の高台脇以下は露胎する。素地は 2.5Y8/2 灰白を呈し間隙あり。釉の発色は良い。	2 層
	青磁	碗	口～底	口径 15.6cm。底径 6.2cm。器高 6.7cm。篋彫りによる蓮弁文。口縁は直口し、鑄はなく、蓮弁間は比較的密につまる。外面は畳付まで施釉し、内面は内底まで施釉。内底に印花。釉は緑色で失透し、貫入有り。	2 層
		碗	口縁部	口径 14.6cm。外反口縁。素地は 2.5Y6/2 灰黄。釉は発色は比較的悪い緑色を呈し、貫入有り。	2 層
		碗	口縁部	口径 19.0cm。玉縁状口縁。素地は 2.5Y6/2 灰黄、釉は発色の悪い緑色。	2 層
		碗	口～底	口径 17.4cm。底径 6.4cm。器高 8.6cm。玉縁口縁。内面は陽刻文、内底に印花を施す。釉は緑色で失透し、内面は内底まで施釉し、外面は外底部を蛇の目釉剥ぎする。	2 層
		碗	底部	底径 6.6cm。高台の畳付け部分は角形を呈し外側がややあがる。外底の畳付から中央部にむけては露胎する。内底は蛇の目釉はぎされ段を有する。素地は 2.5Y7/4 浅黄で、釉は発色の悪い緑色を呈す。	2 層
		皿	口～底	口径 11.4cm。底径 5.0cm。器高 2.8cm。稜花皿。口縁部内面には又状道具で 2 本線のラマ式蓮弁文の弁先を描き、その下には同様の 2 本線で刻花文を描く。内底には一条の圈線。内面は内底まで施釉し、外面は畳付から外底部までが露胎する。釉は濃緑色で、部分的に 2 次焼成がみられる。	2 層
		中国産褐釉陶器	壺	口径 14.0cm。口縁形態Ⅰa 類。素地は 10YR6/6 明黄褐。1mm 以下の白色粒子と 1～3mm の褐色粒子を含む。釉は 10YR3/4 暗褐で発色悪い。	2 層
		壺	口縁部	口径 17.0cm。口縁形態Ⅰa 類。素地は 10YR5/6 黄褐。1mm ほどの白色粒子を多量に含み器面にもあらわれる。釉は 2.5Y3/2 黒褐色を呈し発色悪い。頸部に線状の凹有り。	2 層

第7表 B地区出土遺物観察表2

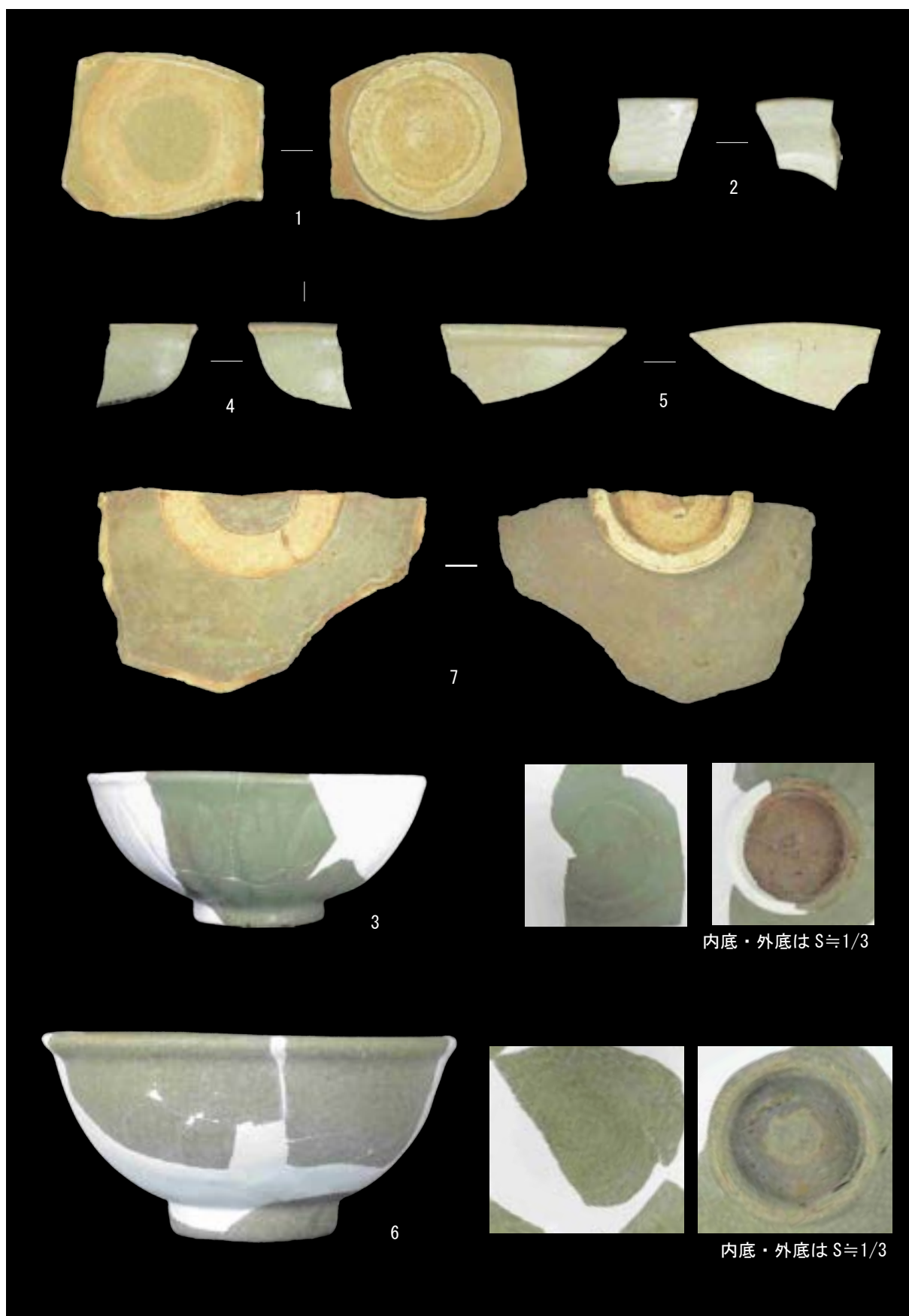
図番号		種類	器種	部位	観察	出土層
第10図・図版4、5	1	中国産褐釉陶器	壺	口縁部	口径10.8cm。口縁はⅡa。横耳が3つ確認され本来は4つで構成されていると推察される。肩部に1.3×3cmのスタンプがおされ「利市」とよめる。釉は2.5Yオリーブ褐で失透し、外面が残存する胴中間部までは全面施釉され、内面は口縁部に部分的にかかり、口縁以下は露胎。素地は10YR5/8黄褐で白色鉱物を多く含む。	2層
	2		壺	口縁部	口径8.4cm。口縁はⅡa。口縁部は内外面ともに釉剥ぎを行い露胎する。外面は口縁以下施釉され、釉は7.5Y4/2灰オリーブ。素地は5Y6/1灰で微細な褐色鉱物を多く含む。	2層
	3		壺	口縁部	口径10.6cm。口縁はⅡa。釉は5Y4/3暗オリーブを呈し、内外面ともに施釉されるが内面は失透する。口唇部は釉剥ぎされる。素地は、5Y6/2灰オリーブで、微細な白色鉱物を多く含む	2層
	4		鉢	口縁部	口縁部は丸く肥厚する。胴部の最大径は口縁直下の胴上部に位置すると推察される。釉は5Y3/2オリーブ黒で失透し、内外面とも施釉されるが、外面の一部が露胎。素地は5Y灰で微細な白色鉱物を多く含む。	2層
	5	黒釉陶器	小碗	底部	底径4.2cm。外底の削りは浅く高台脇を平坦に削り込む。内底は段をもって円形にくぼむ。釉はオリーブ黒で、外面が腰部まで施釉され、内面は全体的に施釉される。素地は5Y8/4浅黄。	2層
	6	土器	鍋	胴部(耳)	一部欠損。縦1.8cm、厚さ2.2cmの舌状をなし、ほぼ水平に貼付。貼付部分には指押さへの調整残る。胎土は外面は明黄褐色を呈すが、内面はオリーブ黒色を呈す。貝殻碎片と思われる混和剤を密に含む。	2層
	7		鍋	胴部(耳)	耳は横6.4cm、縦2.5cm、厚さ2.1cmの舌状をなし、ほぼ水平に貼付。横位の指ナゲ調整。胎土は外面は明黄褐色を呈すが、内面はオリーブ黒色を呈す。貝殻碎片と思われる混和剤を密に含む。	2層
	8		鍋	胴部(耳)	一部欠損。耳は横7.0cmで、ほぼ水平に貼付。胎土はオリーブ黒色を呈し、貝の碎片と思われる混和剤を密に含む。	2層
第11図・図版6、7	1	白磁	碗	底部	底径8.0cm。今帰仁タイプのⅠ類。内底、外底ともに露胎。底部の中央部にいくにしたがい器壁は薄くなる。畳付の幅は比較的広く、高台脇を僅かに削り回す。素地は2.5Y7/3浅黄。	表採
	2		碗	底部	底径6.4cm。外底は高台脇から露胎し、内底は蛇の目釉剥ぎ。素地は5Y7/3浅黄。釉は2.5Y7/2灰黄を呈し貫入有り。	表採
	3		碗	口縁部	ビロースクⅢ類。外面には轆轤痕を残す。素地は2.5Y8/2灰白で釉の発色は良い。	表採
	4	青磁	碗	口縁部	口径13.0cm。口縁は直口。外面に篋彫による幅広の蓮弁文。素地は5Y7/2灰白、釉は発色のやや悪いオリーブ灰色。	表採
	5		碗	口縁部	口径16.6cm。外反口縁。外面は轆轤痕を残す。素地は5Y7/1灰白。釉の発色は悪く緑色で貫入多く有り。	表採
	6		碗	口縁部	口径18.0cm。玉縁口縁。素地は5Y灰で白色鉱物を含む。釉は発色よく暗オリーブを呈し貫入有り。	表採
	7		碗	口～底	口径18.0cm。底径5.4cm。器高8.0cm。玉縁口縁。内底は輪状釉はぎし、外面は畳付から外底部までが露胎する。釉は緑色で失透し、貫入有り。	表採
	8		碗	口縁部	口径13.0cm。口縁は直口し、外面に線彫による細蓮弁文。素地2.5Y7/2灰白。釉は発色の悪い緑色。	表採
	9		皿	口～底	口径14.0cm、底径6.0cm。器高3.7cm。外反口縁し、腰折れの無文。内底に印花を施すが不鮮明。内面は内底まで施釉し、外面は外底の途中まで釉がかかる。また、外底部には砂目が残る。釉は淡緑色で失透。	表採
	10		皿	口縁部	口径11.0cm。口縁は肥厚する。素地は5Y7/2灰白。釉は失透し薄い緑色。	表採

第8表 B地区出土遺物観察表

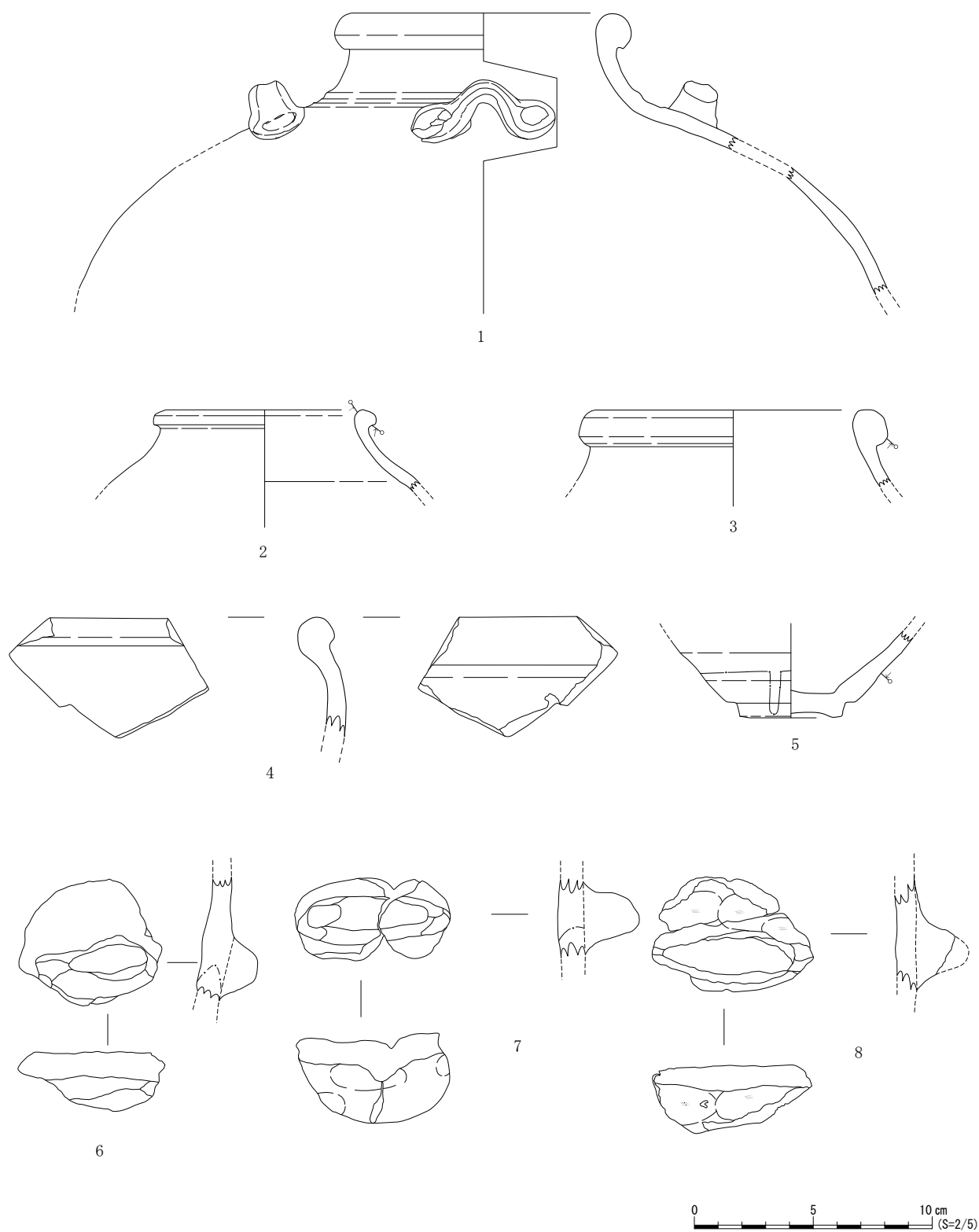
図番号		種類	器種	部位	観察	出土層
第11図・図版6、7	11	青磁	盤	口～底	口径25.0cm。底径14.0cm。器高5.2cm。口縁は玉縁の形態をなす。内面体部には縦位の線刻を複数施すが、単位が不鮮明。内底には印花を施す。内面は内底まで施釉し、外底は蛇の目釉剥ぎを行う。外底は碁笥底の形状をなす。釉は緑色でやや失透し貫入有り。	表採
	12	青磁	八角杯	口縁部	口径7.0cm。内面の口唇部に1条の圈線。素地は5Y8/3浅黄。釉は発色が比較的良好な緑色。	表採
第12図・図版8、9	1	中国産褐釉陶器	壺	口縁部	口径20.0 cm。口縁形態Ⅰa。耳の部分が欠損するが縦耳と推察される。素地は10Y5/1灰色を呈し、微細な白色鉱物を多く含み、褐色の鉱物も混在する。釉は5D4/1暗緑灰色を呈す。外面は施釉するが、内面は部分易に釉がかかるが、基本的には露胎。	表採
	2		壺	口縁部	口径11.6cm。口縁形態Ⅱa。外面には部分的に轆轤痕が残る。釉は剥落するが褐色系の釉で、外面は施釉され内面は部分的に釉がかかる。素地は2.5Y7/2灰黄、微細な褐色の鉱物を多く含み、白色の鉱物も僅かに含む、	表採
	3		壺	口縁部	口径11.0cm。口縁形態はⅡa。横耳を有する。外面は2次焼成のためか器面があれた状態にある。釉は剥落も多く褐色系の釉で、外面は施釉されるが、内面は部分的に釉がかかる。素地は7.5Y5/1灰で、微細な褐色粒子と白色粒子を多く含む。	表採
	4		壺	口縁部	口径10.2cm。底径10.6cm。器高26.0cm。口縁はⅡa。外面は轆轤痕が残る、胴部の最大径は胴上部に位置する。底部は中央部にむかって盛り上がる。横耳は一つのみが残存する。外面は底部の脇まで施釉され、内面は口縁部まで釉がかかる。釉は7.5Y3/2オリーブ黒で失透。	表採
	5		壺	口縁部	口径16.2 cm。方形の口縁。口唇部には砂目痕が2つ残り、外面にも部分的にみられる。素地は5Y5/2灰オリーブで、微細な白色鉱物を密に含む。外面は施釉され、内面は露胎する。釉は暗オリーブを呈す。	表採
	6		壺	口縁部	口径14.4cm。方形の口縁。口縁の内面に一条の凹をもち、口縁直下の内面もえぐれたような器状をなす。内外面ともに施釉され、釉は暗オリーブで失透。素地は7.5Y6/2灰オリーブで微細な褐色粒子を少量含む。	表採
	7		壺	口縁部	口径13.8cm。口縁は逆フの字形。肩部は有段の形状をなし、胴部の最大径は肩部に位置する。口径に比して胴長の形状をなすものと推察される。外面には、斜位の叩き調整の痕が明瞭に残り、内面には部分的に同心円状の当て具の痕がのこる。内外面とも施釉され、釉は5Y4/4暗オリーブで失透。素地は7.5Y6/3オリーブ黄で、白色鉱物を僅かに含む	表採
第13図・図版10	1	中国産褐釉陶器	壺	胴部～底部	底径10.5cm。底部は中央部分が盛り上がり薄手。内面は露胎し、外面は底部の脇近くまで施釉。釉は2.5Y3/2黒褐で失透。素地は5Y5/1灰。微細な褐灰の鉱物を多く含む。	表採
	2			底部	底径14.0cm。底部は中央部に向って盛りあがる。内面は成形痕が明瞭に残る。2.5Y5/4黄褐で、中心部は2.5Y5/1黄灰を呈す。2～3mmの褐色鉱物を密に含み、器面にもあらわれる。外面の底部脇まで施釉するが、外底及び内面は露胎。釉は黄褐色を呈す。	表採
	3			底部	底径15.0cm。外底の外縁部は粘土がやや盛り上がり、内部が上底状を呈す。外面の高台脇に縦位の成形痕あり。2に比べ厚手。素地は10YR5/6黄褐。内底は施釉され、外面は露胎。釉は7.5YR5/3にぶい褐を呈す。	表採
	4			底部	底径12.2cm。外底の外縁部は粘土がやや盛り上がり、内部が上底状を呈す。外面の高台脇に縦位の成形痕あり。内面は轆轤痕が明瞭に残る。2に比べ厚手。素地は10YR5/6黄褐。白色鉱物を含む。内底は施釉され、外面は露胎。釉は7.5YR5/3にぶい褐を呈す。	表採
	5		鉢	口縁部	ての字形口縁。外面は露胎するが、内面は施釉。釉は2.5Y5/3黄褐。1mm前後の褐色の鉱物を含む。	表採
	6			口縁部	玉縁状の口縁。全面露胎。素地は2.5Y7/4浅黄。1mm前後の白色鉱物や褐色の鉱物を含む。	表採



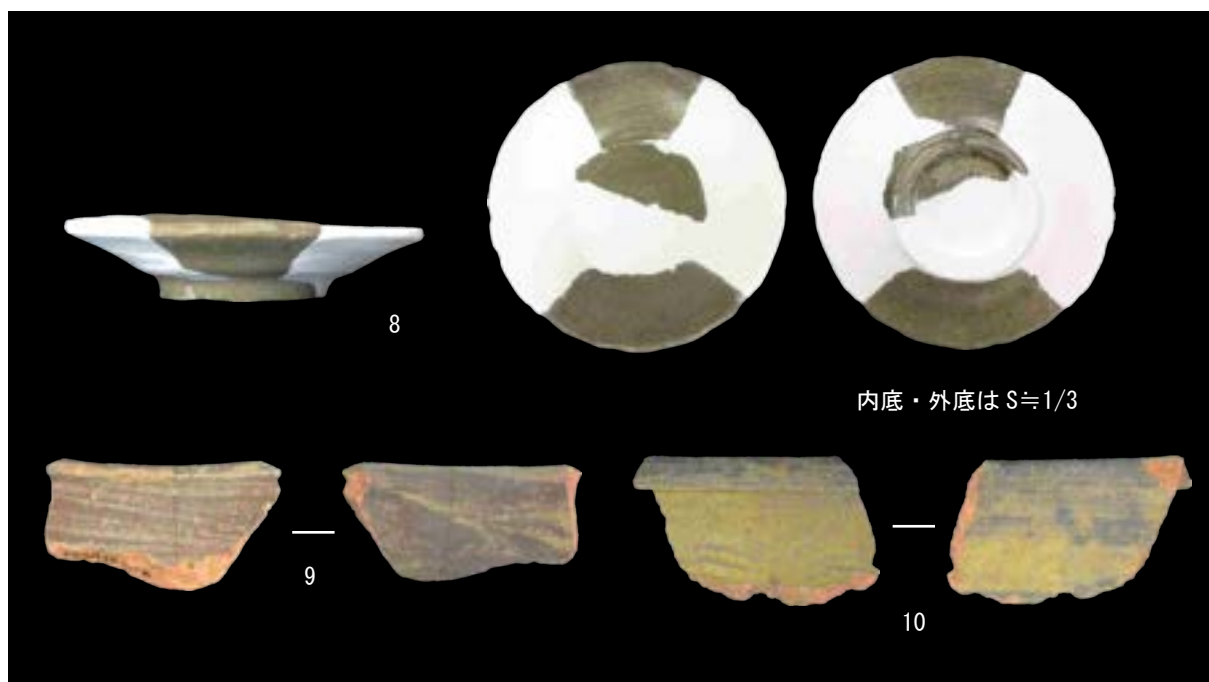
第9図 白磁・青磁・中国産褐釉陶器 (B地区・2層)



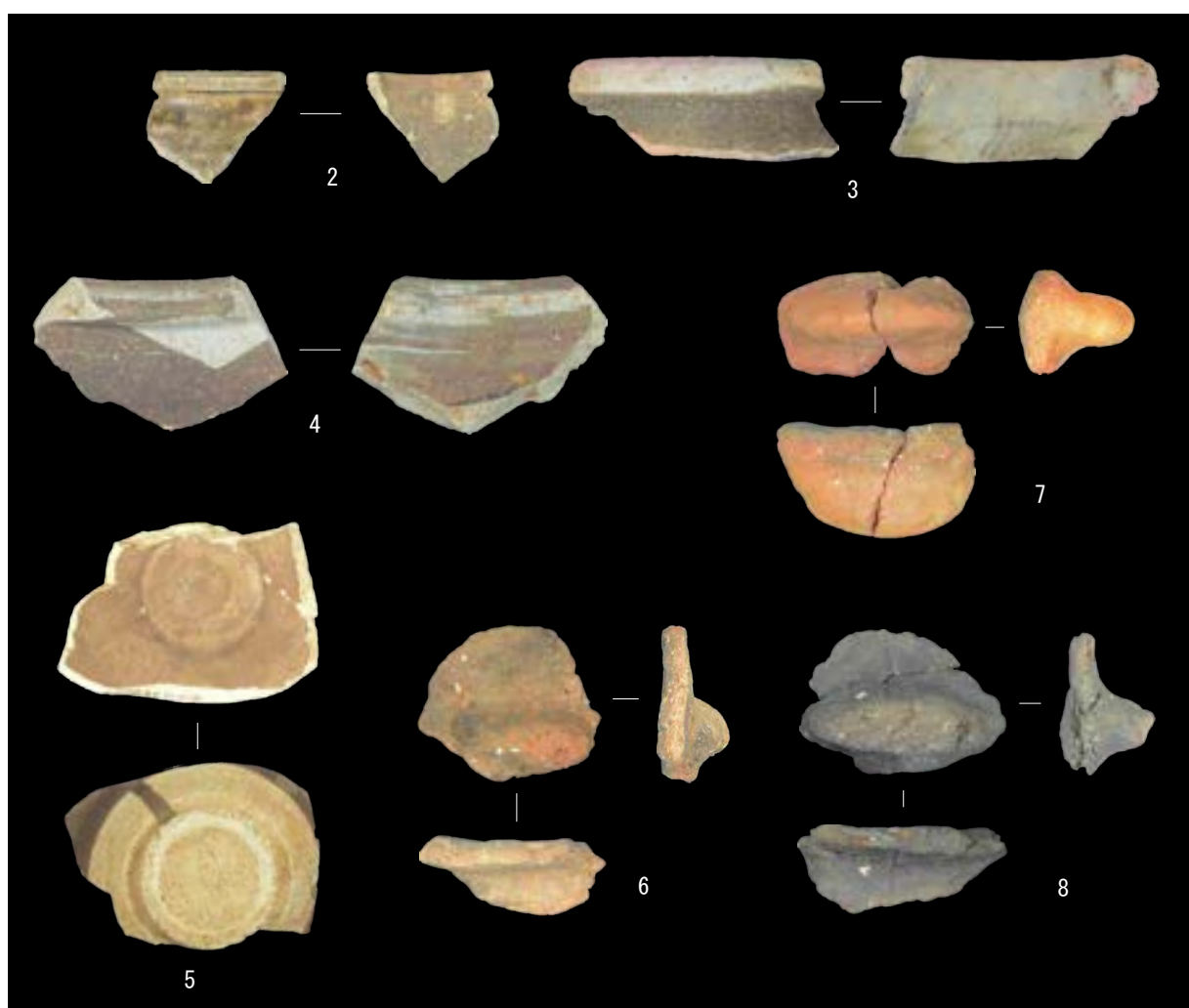
図版 2 白磁・青磁・中国産褐釉陶器 (B地区、2層 (S ≒ 2/5))



第 10 図 中国産褐釉陶器・黒釉陶器・土器



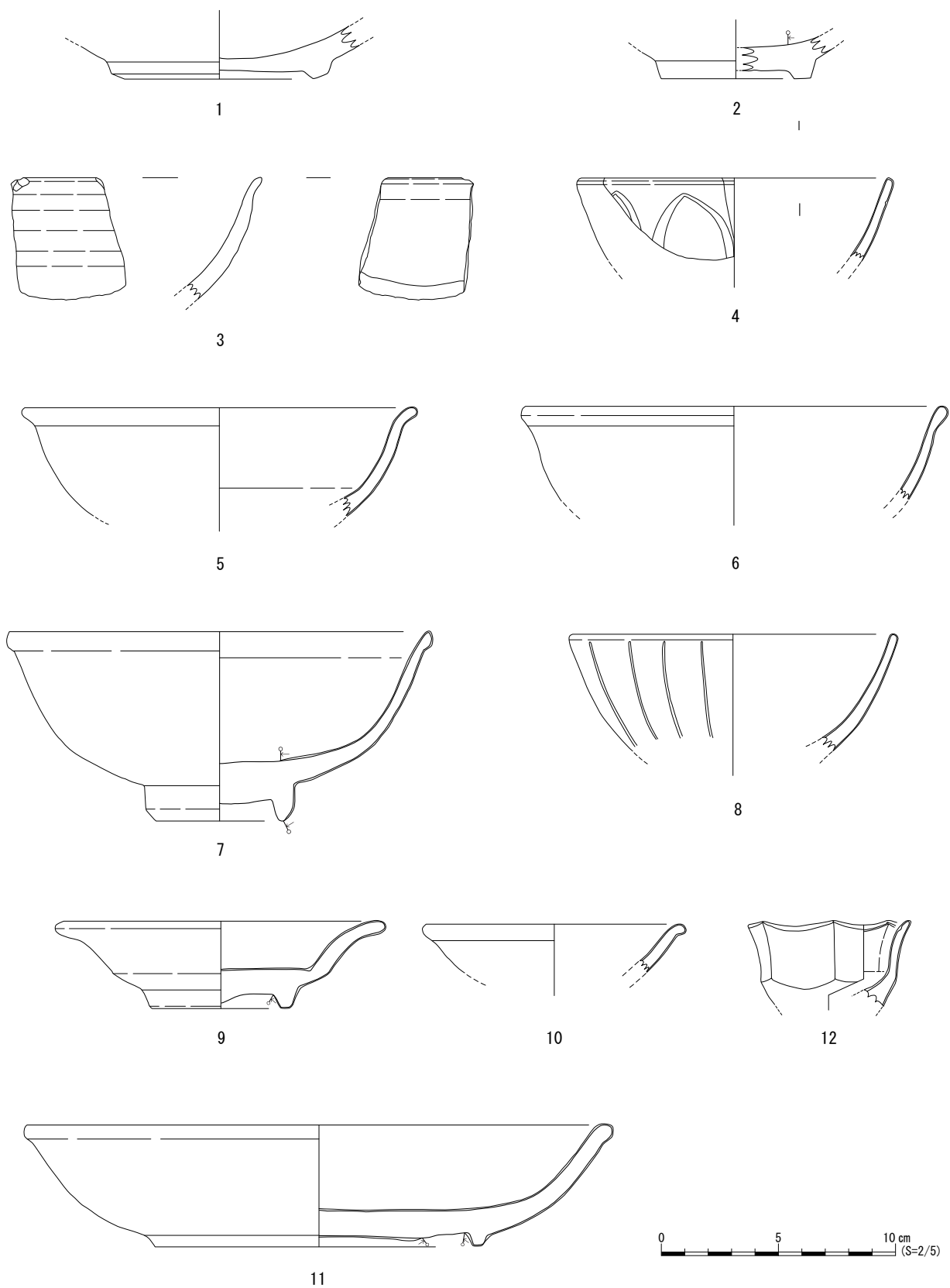
図版 3 白磁・青磁・中国産褐釉陶器 (B地区、2層 ($S \approx 2/5$))



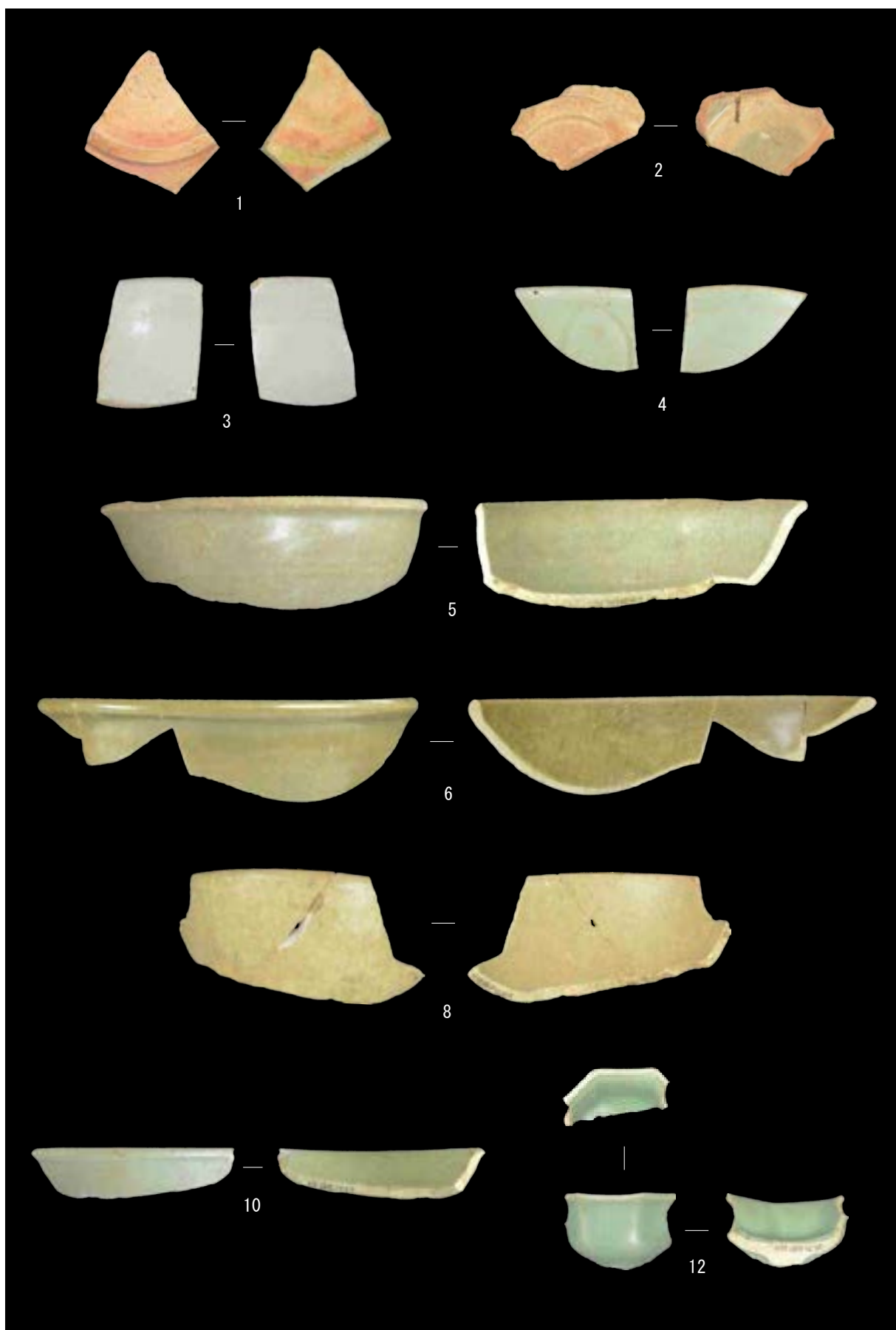
図版 4 中国産褐釉陶器・黒釉陶器・土器 (B地区、2層 ($S \approx 2/5$))



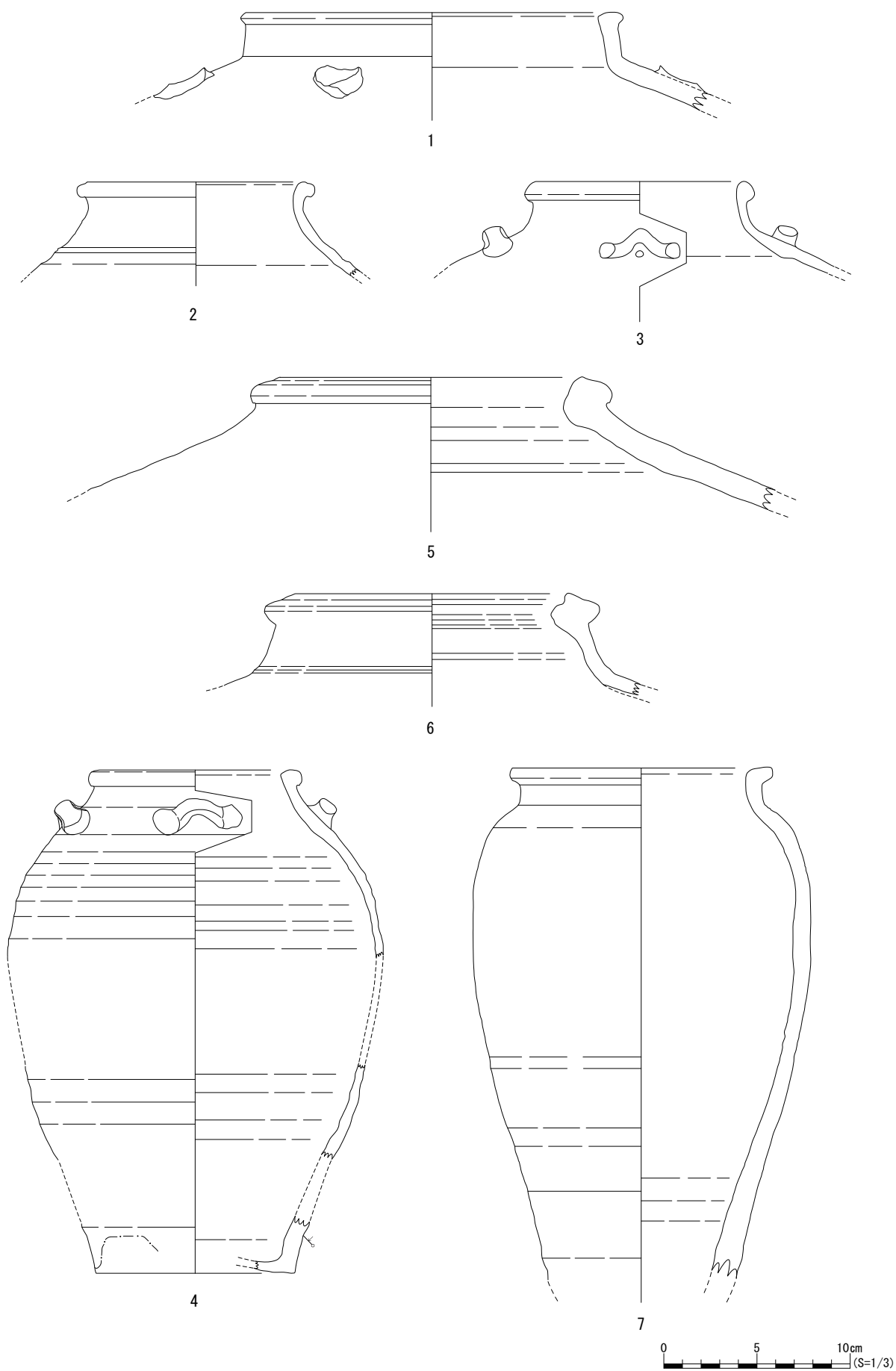
图版 5 中国産褐釉陶器（B地区、2層（S 2/5）



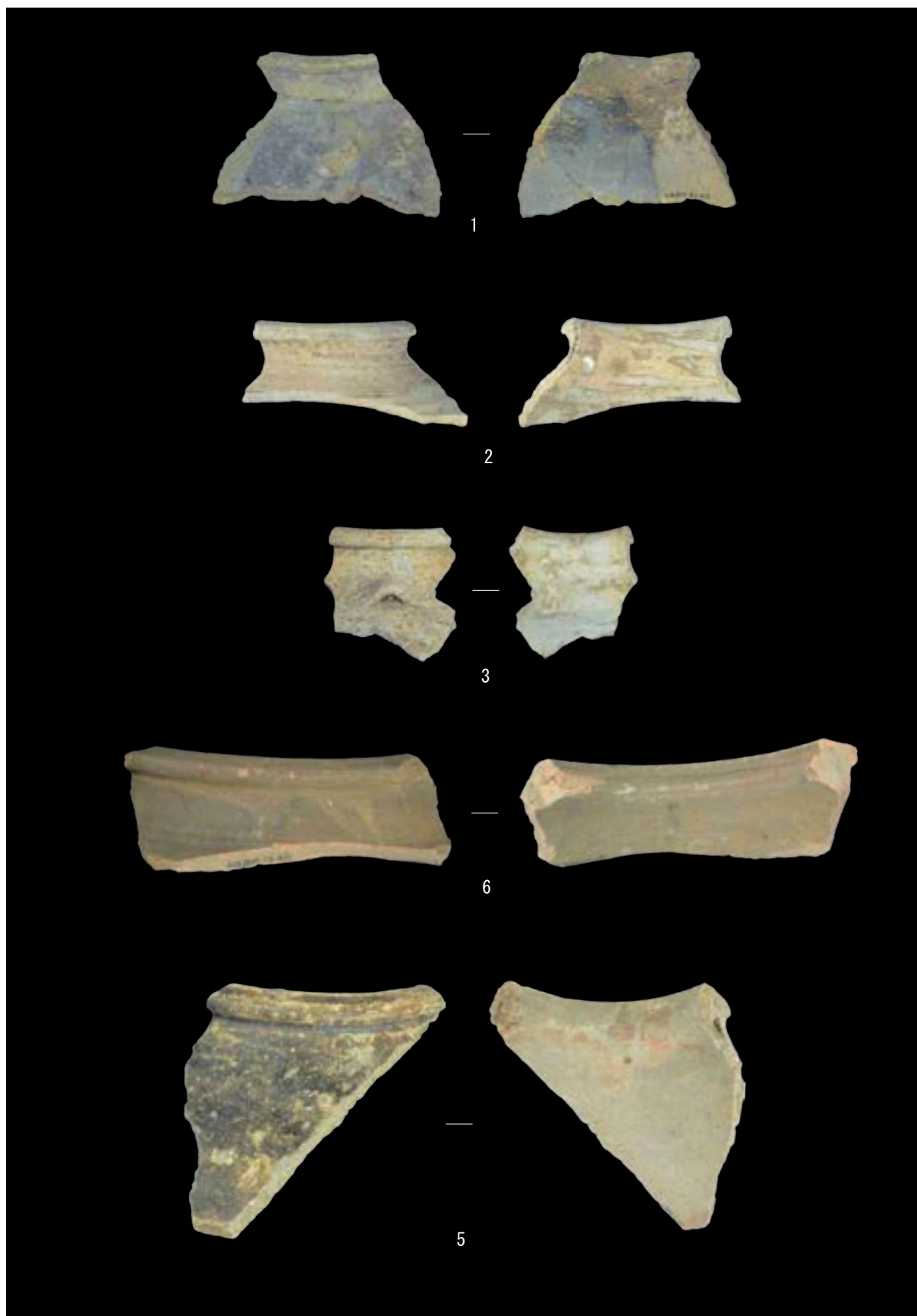
第 11 図 白磁・青磁 (B 地区、石積部分表採・1 層)



图版 6 白磁・青磁 (B地区、石積部分表採・1層 (S ≒ 2/5))



第 12 図 中国産褐釉陶器（B 地区、石積部分表採・1 層）



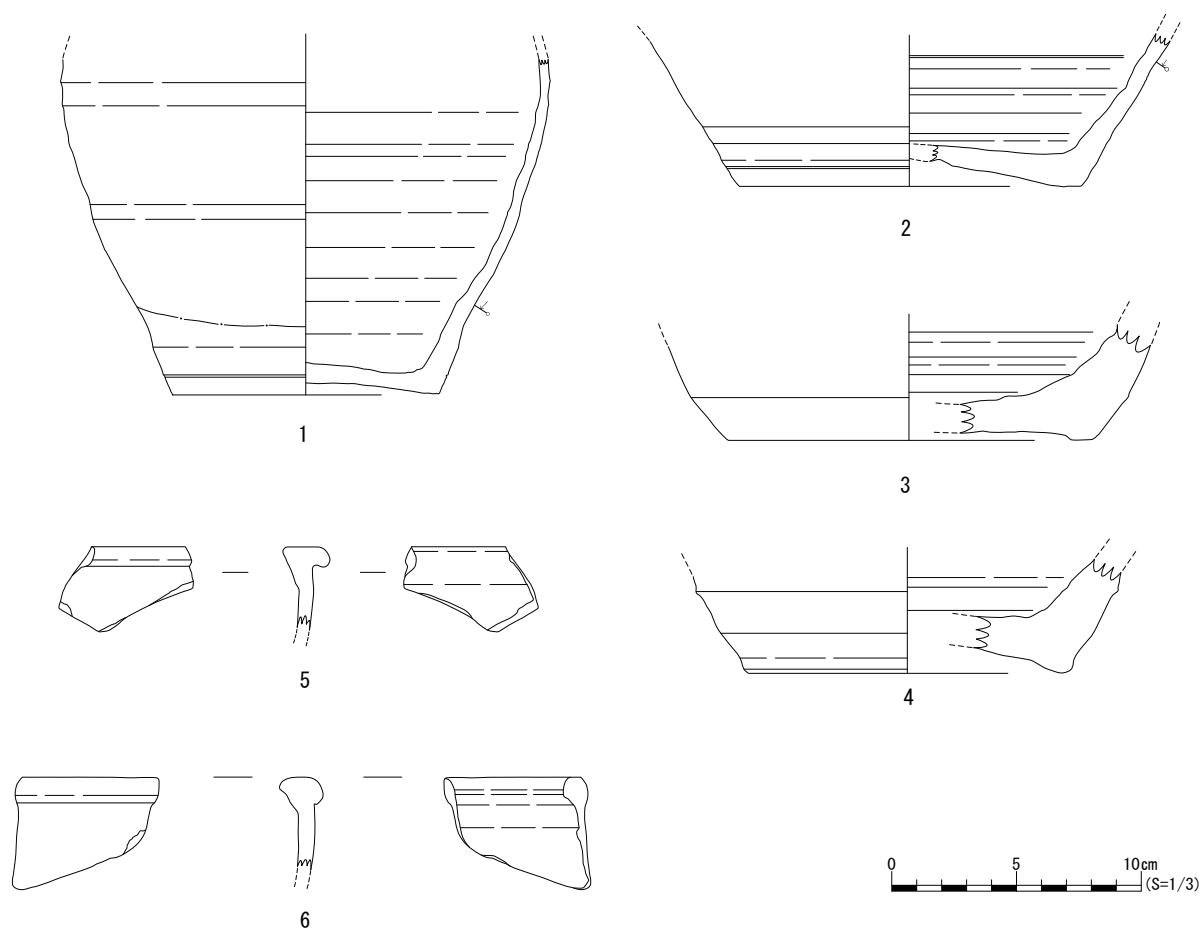
図版 8 中国産褐釉陶器（B地区、石積部分表採・1層（S ≒ 1/3）



図版 9 中国産褐釉陶器② (B地区、石積部分表採・1層 (S ≒ 1/3))



図版 10 中国産褐釉陶器③ (B地区、石積部分表採・1層 (S ≒ 1/3))



第 13 図 中国産褐釉陶器（B地区、石積部分表採・1層）

第5節 貝類遺体

貝類遺体は、陸産と海産の貝類の出土があり、海産の貝類が圧倒的に多い割合を示す。

陸産貝類は、アオキナワウスカワマイマイ、アカマイマイ、アフリカマイマイ、ミヤコヤマタニシの4種類が確認されている。全体的にオキナワウスカワマイマイの出土が多いようにみえるが、他の種類についても一定の出土が確認できる。

海産の貝類の2層の出土状況をみるとチョウセンサザエ、コオニコブシ、マガキガイの出土が非常に高い割合を示す。いずれもリーフ内にも生息する貝類であることから、グスク時代の集落遺跡の生業活動の一端をうかがい知ることができる。



1 アカマイマイ 2 オキナワウスカワマイマイ 3 ミヤコヤマタニシ 4 アフリカマイマイ

図版 11 陸産貝類 (S=3/5)

第9表 貝類遺体集計表・陸産貝類

貝種		形態	A地区 表採	最少個 体数	A地区 1層	最少個 体数	A地区 2層	最少個 体数	B地区 表採	最少個 体数	B地区 1層	最少個 体数	B地区 2層	最少個 体数	B地区 2層 (石積 内)	最少個 体数	B地区 2層 (北側)	最少個 体数	B地区 石積部 分 表採	最少個 体数	合計	最少個 体数
科	種																					
オナジマイマイ科 Bodybaenidae	オキナワウスカワマイマイ	完形			1				23		1				4		11		1			
	A.despecta	殻頂	0		1		0		5	28		1		0		7	18				0	
		破片			1				49		9				6		69		1			
	アカマイマイ Aegista oculus	完形													4		6					
		殻頂	0		0		1	1	6	6		0		0	4		3	9		0		0
		破片					1								4		4					
アフリカマイマイ科 Achatinidae	アフリカマイマイ A.fulica	完形							8						7		1					
		殻頂	0		0		1	1	8	16		1	1	0			8	1	1		0	
		破片			16		4		48		28						22		7			
ナンバンマイマイ科 Camaenidae	サキシマヒシマイマイ	完形																				
		殻頂			0			0			0		0		0			0		0		0
		破片																				
ヤマタニシ科	ミヤコヤマタニシ	完形					2	15							4		11					
		殻頂	0		0		2	4		15		0		0			4	11	11		0	0
		破片			1		35		2									19				

第10表 貝類遺体集計表・海産貝類 1

貝種		形態	A地区 表採	最少個 体数	A地区 1層	最少個 体数	A地区 2層	最少個 体数	B地区 表採	最少個 体数	B地区 1層	最少個 体数	B地区 2層	最少個 体数	B地区 2層 (石積 内)	最少個 体数	B地区 2層 (北側)	最少個 体数	B地区 石積部 分 表採	最少個 体数	合計	最少個 体数
科	種																					
カゴガイ科 Fimbridae	種類不明	完形																				
		殻頂	0		0		0		0		0		0		0		0		0		0	
		破片					1										7		4			
ツキガイ科 Lucinidae	ツキガイ C.tjerina	完形		0		0		0		0		0		0		0		0		0	0	
		殻頂								5		2						1				
		破片																				
アサジガイ科 Semelidae	フルイガイ S.cordiformis	完形																				
		殻頂	0		0		0		0		0		0		0		0		1		0	
		破片																				
シジミ科 Corbiculidae	リュウキュウヒルギシ ミ G.erosa	完形																				
		殻頂	0		0		0		0		0		0		0		1	1		0	0	
		破片																				
ミノガイ科 Limidae	ミノガイ L.vulgaris	完形																				
		殻頂	0		0		0		0		0		0		0		2	0		0	0	
		破片																				
イタボフガイ科 Ostreidae	マガキ C.gigas	完形																				
		殻頂	0		0		0		0		0		0		0		1	0		0	0	
		破片																				
タマキガイ科 Glycymerididae	ソメフケグリ Greevei	完形																				
		殻頂	0		0		0		1	1		0		0		1	0		0		0	
		破片																				
科不明	種類不明	完形																				
		殻頂	0		0		0		1	1		0		0		1	1	1	1		0	0
		破片								3		4				1	4	19				

第 11 表 貝類遺体集計表・海産貝類 2

貝種		形態	A地区 表採	最少個 体数	A地区 1層	最少個 体数	A地区 2層	最少個 体数	B地区 表採	最少個 体数	B地区 1層	最少個 体数	B地区 2層	最少個 体数	B地区 2層 (石積 内)	最少個 体数	B地区 2層 (北側)	最少個 体数	B地区 石積部 分 表採	最少個 体数	合計	最少個 体数
科	種																					
アマオブネガイ科 Neritidae	アマオブネガイ N.albicilla	完形		0		0		0		0		0		0	1	1		0		0		0
		殻頂																				
		破片																		0		
	コシダカアマガイ N.striata	完形		0		0		0		0		0		0			4		2		2	0
		殻頂																				
		破片															1					
	種類不明	完形						1	1			0		0	1	1		0		0		0
		殻頂		0		0							0						3			
		破片																				
ニシキウズガイ科 Trochidae	サラサバテイ T.niloticus	完形	1	1		0	1	1		0	2	2		0		0	4		2		8	0
		殻頂															4		3	7	6	
		破片					2											9		15		
	ニシキウズガイ T.maculatus	完形		0		0		0		0		0		0		3		4		4	0	0
		殻頂																				
		破片														1		5		1		
	ハクシヤウズ T.histrio	完形		0		0		0		0		0		0						1		
		殻頂																				
		破片																				
	ムラサキウズ T.stellatus	完形		0		0		0	3	3		0		0		4	4	2		3	5	13
	殻頂																	3		0	0	
	破片				1			1							6			13		5		
ウズイチモンジ T.rota	完形		0		0		0		0		0		0							1		
	殻頂																		1			
	破片																	4				
	種類不明	完形		0		0		0	2	2		0		0								
		殻頂																				
		破片			2			3		2						1	1		45		8	
サザエ科 Turbinidae	チョウセンサザエ T.argyrostomus	完形				0		3								3		3		5		
		殻頂					2	2	2	5	4	4		0		4	7	9	12	7	12	0
		破片					5		16		5					12		64		24		
	チョウセンサザエの蓋	完形	8	8	28	29	7	7	71	76	13	14		0		35	36	115		89		
		殻頂			1				5		1					1		3				
		破片							1							2		11				
	ヤコウガイ T.marmoratus	完形		1		0		0		0		0		0		1	1		0	1	1	0
		殻頂																				
		破片							6							6		12		5		
	ヤコウガイの蓋	完形		0		0		0		0		0		0							0	0
	殻頂																					
	破片																					
オオウラウズガイ A.rhodostoma	完形		0		0		0		1	1	0		0				1		1		0	
	殻頂																					
	破片								1													
	種類不明	完形		0		0		0		0		0		0							0	0
		殻頂																				
		破片																				
アツキガイ科 Muricidae	テツレイシダマシ T.sp	完形		0		0		0		0		0		0					1		2	0
		殻頂																		1		
		破片							1													
	ウニレイシダマシ T.muricata	完形		0		0		0		0		0		0		1	1		0		0	0
		殻頂																				
		破片																				
	ツノレイシ M.tuberosa	完形		0		0	2	2	1	1		0		0		5	5		2		3	0
		殻頂																				
		破片																		1		
	ムラサキガイレイシ D.morum morum	完形		0		0		0		0		0		0		1	1		1		1	0
		殻頂																				
		破片								1								2				
	キマダライガイレイシ D.ricinus ricinus	完形		0		0		0				0		0		1	1		0		0	0
		殻頂																				
		破片																				
テツレイシ T.savignyi	完形		0		0		0		0		0		0				2		2		0	
	殻頂																					
	破片																					
ツノテツレイシ M.hippocastanus	完形		0		0		0		0		0		0				6		8		0	
	殻頂																	2				
	破片																	3				
シラクモガイ T.armigera	完形		0	1	1		0	1	1	0		0		0		2	2	6		6	11	0
	殻頂																					
	破片																			1		
アカイガイレイシ D.rubusidaeus	完形	3	3		0	2	2	2	2	2	0		0		5	5	6		10		10	0
	殻頂																					
	破片					1												3		9		
ガンゼキボラ C.brunneus	完形		0		0		0		0		0		0							1		
	殻頂																					
	破片																					
アカイガイレイシに酷似	完形		0		0		0		0		0		0								0	0
	殻頂																					
	破片																					
	種類不明	完形		0		0		0		0		0		0								0
		殻頂																				
		破片							3						2				11			
フジツガイ科 Ranellidae	ホラガイ C.tritonis	完形		0		0		0		0		0		0				0		0		0
		殻頂																				
	種類不明	完形		0		0		0		0		0		0						0		0
		殻頂																				
		破片																				
オニコブシガイ科 Turbinellidae	オニコブシガイ V.ceramicum	完形		0		0		0		0		0		0				1		1		0
		殻頂																				
		破片																				
	コオニコブシ V.turbinellum	完形		1		0	1	1	5	6	0		0		22	24	26		28		0	
		殻頂					1		1						2		13		5		33	
		破片							5								10		3			
	種類不明	完形		0		0		0		0		0		0						0		0
		殻頂																				
		破片																				
エジバイ科 Buccinidae	種類不明	完形		0		0		0		0		0		0				1		2		0
		殻頂																				
		破片																				
オキニシ科 Bursidae	オキニシ B.bufoia bunkeri	完形	1	1		0		0		0		0		0		2	2	4		1		0
		殻頂																				
		破片																				
ソデボラ科 Strombidae	マガキガイ S.luhuanus	完形	3	3	1	1		0	3	18	1	4		0	19		5		11		0	
		殻頂							15		3				6	25	24		14		25	
		破片	1								1						1		2			
	クモガイ L.lambis	完形		0		0		0		0		0		0		1	1		1		2	0
		殻頂																				
		破片																				
	スイジガイ L.chiragra chiragra	完形		0		0		0		0		0		0					1		1	0
		殻頂																				
		破片																				
	種類不明	完形		0		0		0	1	1	1	1		0								

第12表 貝類遺体集計表・海産貝類3

貝種		形態	A地区 表採	最少個 体数	A地区 1層	最少個 体数	A地区 2層	最少個 体数	B地区 表採	最少個 体数	B地区 1層	最少個 体数	B地区 2層	最少個 体数	B地区 2層 (石積 内)	最少個 体数	B地区 2層 (北側)	最少個 体数	B地区 石積部 分 表採	最少個 体数	合計	最少個 体数
科	種																					
タカラガイ科 Cypraeidae	ホンシダカラ C.tigris	完形													1				1			
		殻頂 破片	0		0				1		0		0		1	2		0	2	1		0
	ヒメホンシダカラ C.lynx	完形																	1			
		殻頂 破片	0		0				1		0		0			0		0	1			0
	ハナマルユキ C.caputserpentis	完形							6		2					1		6				
		殻頂 破片	0		1		1	1	9	15	5	7		0	15	15	7	8	9	15		0
	ハナビラタカラガイ C.annulus	完形							1		2				3				27			
		殻頂 破片	0		0			0	1		0		0			0		0				0
	ヤクシマダカラ C.arabica asiatica	完形															1		1			
		殻頂 破片	0		0			0			0		0			0	3	4	2	3		0
	ホソヤクシマダカラ C.elegantina	完形													1				7			
		殻頂 破片	0		0			0			0		0		1	1		0				0
	ハチジョウダカラ C.mauritiana	完形													1							
		殻頂 破片	0		0			0	1		0		0		1	1		0		1		0
イモガイ科 Conidae	アンボンクロザメ C.litteratus	完形																	1			
		殻頂 破片	0		0			0			0		0		1	1		1	1	1		0
	マダライモ C.ebraeus	完形															2		2			
		殻頂 破片	0		0			0			0		0			0		0		0		0
	コマダライモ C.chaldaeus	完形							1													
		殻頂 破片	0		0			0		1		0		0		0		0		0		0
	種類不明	完形							2								3		3			
		殻頂 破片	0		5	5	1	1	3	5	2	2		0	6	6	23	26	11	11		0
イトマキボロガイ科 Fasciolaridae	リュウキュウツノマタガイ L.polygonus	完形							1										1			
		殻頂 破片	0		0			0		1		0		0		0		0		1		0
	ヒメイトマキボロ P.trapezium paeteli	完形													1							
		殻頂 破片	0		0			0		0		0		0		1		0		3		0
	マルニシ L.smaragdula	完形															1		2			
		殻頂 破片	0		0			0		0		0		0		0	1		3			0
フデガイ科 Mitridae	種類不明	完形																				
		殻頂 破片	0		0			0		1		0		0		0		0				0
マクラガイ科 Lsognomonidae	種類不明	完形																				
		殻頂 破片	0		0			0							1			0				0
ムカデガイ科 Vermetidae	種類不明	完形																				
		殻頂 破片	0		0			0							1			0				0
フトヘナタリ科 Potamididae	センニンガイ T.telescopium	完形																				
		殻頂 破片	0		0			0		1	1			0		0		0		0		0
オニノツノガイ科 Cerithiidae	オニノツノガイ C.nodulosum	完形																	2			
		殻頂 破片	0		0			0		0		0		0		0	2	2		2		0
	種類不明	完形																				
		殻頂 破片	0		0			0						1	1		0			0		0
シャコガイ科 Tridacnidae	シラナミガイ T.maxima	完形													1							
		殻頂 破片	0		0			0		2	1	1		0		1	1	1	5			0
	ヒメシャコガイ T.crocea	完形	1												1							
		殻頂 破片	1	1		0		0		1		0		0		1		0				0
	ヒレナシシャコガイ T.derasa	完形																				
		殻頂 破片	0		0			0				0		0		0		0		2		0
	ヒレシャコガイ T.squamosa	完形																	1			
		殻頂 破片	0		2			0				0		0	1			0		2		0
	シャゴウガイ H.hippopus	完形																				
		殻頂 破片	0		0			0		1		0		0		0		0		1		0
マルスダレガイ科 Veneridae	アラヌノメガイ P.reticulata	完形													2				1			
		殻頂 破片	0		0			0		1		0		0		2		3	4	1		0
	ホソスジイナミガイ G.pectinatum	完形							1										1			
		殻頂 破片	0		0			0				0		0		0		1	1			0
	アラスジケマンガイ G.tumidum	完形													1							
		殻頂 破片	0		0			0				0		0		1		0				0
シオサザナミ科 Psammobiidae	リュウキュウマスオ A.violascens	完形																	1			
		殻頂 破片	0		0			0				0		0		2	2	0		1		0
ニッコウガイ科 Tellinidae	サメザラ S.scobinata	完形																				
		殻頂 破片	0		0			0				0		0				0				0
キクザルガイ科 Chamidae	種類不明	完形																				
		殻頂 破片	0		0			0				0		0				0		1		0
ウミギク科 Spondyliidae	種類不明	完形																				
		殻頂 破片	0		0			0				0		0			2	2				0
ザルガイ科 Cardidae	カワラガイ F.unedo	完形																	1			
		殻頂 破片	0		0			0				0		0		0		2	4			0
	リュウキュウザル R.flavum	完形																				
		殻頂 破片	0		0			0		1	1			0		0		0				0



図版 12 貝類遺体①

1 サラサバティ 2 ニシキウズガイ 3 オオウラウズガイ 4 ムラサキウズ 5 ウズイチモンジ 6 ハクシャウズ
 7 チョウセンサザエ 8 アンボンクロザメ 9 マガキガイ 10 マダライモ 11 コマダライモ 12 ツノレイシ
 13 ツノテツレイシ 14 テツレイシ 15 テツレイシダマシ 16 アカイガレイシ 17 ムラサキイシガレイ
 18 キマダライガレイシ 19 オニコブシガイ 20 コオニコブシガイ 21 オキニシ 22 マルニシ
 23 シラクモガイ 24 ガンゼキボラ 25 ヒメイトマキボラ 26 オニノツノガイ 27 センニンガイ
 28 リュウキュウツノマタガイ 29 コシダカアマガイ 30 アマオブネガイ



図版 13 貝類遺体②

31 クモガイ 32 ヤコウガイ 33 スイジガイ 34 ハチジョウダカラ 35 ホシダカラ 36 ヤクシマダカラ
 37 ホソヤクシマダカラ 38 ハナマルマキ 39 ハナビラタカラガイ 40 ホシキヌタ 41 ヒレシャコガイ
 42 ヒメシャコガイ 43 シラナミガイ



図版 13 貝類遺体③

44 リュウキュウヒルギシジミ 45 リュウキュウマスオ 46 ソメワケグリ 47 カワラガイ 48 アラヌノメガイ
49 アラスジケマンガイ 50 ホソスジイナミガイ 51 フレイガイ

第4章 報告－国仲美里の壕－

国仲美里の壕は、4つの壕から構成される。4つの壕はいずれも国仲元島遺跡の北側に位置する。この北側部分は、現在谷地形を形成しており、その谷をはさんだ丘陵の中腹から下部に4つの壕が点在している。谷地をはさんで南側の壕を壕①、②とし、北側の壕を壕③、④とした。以下に各壕の調査成果について記す。

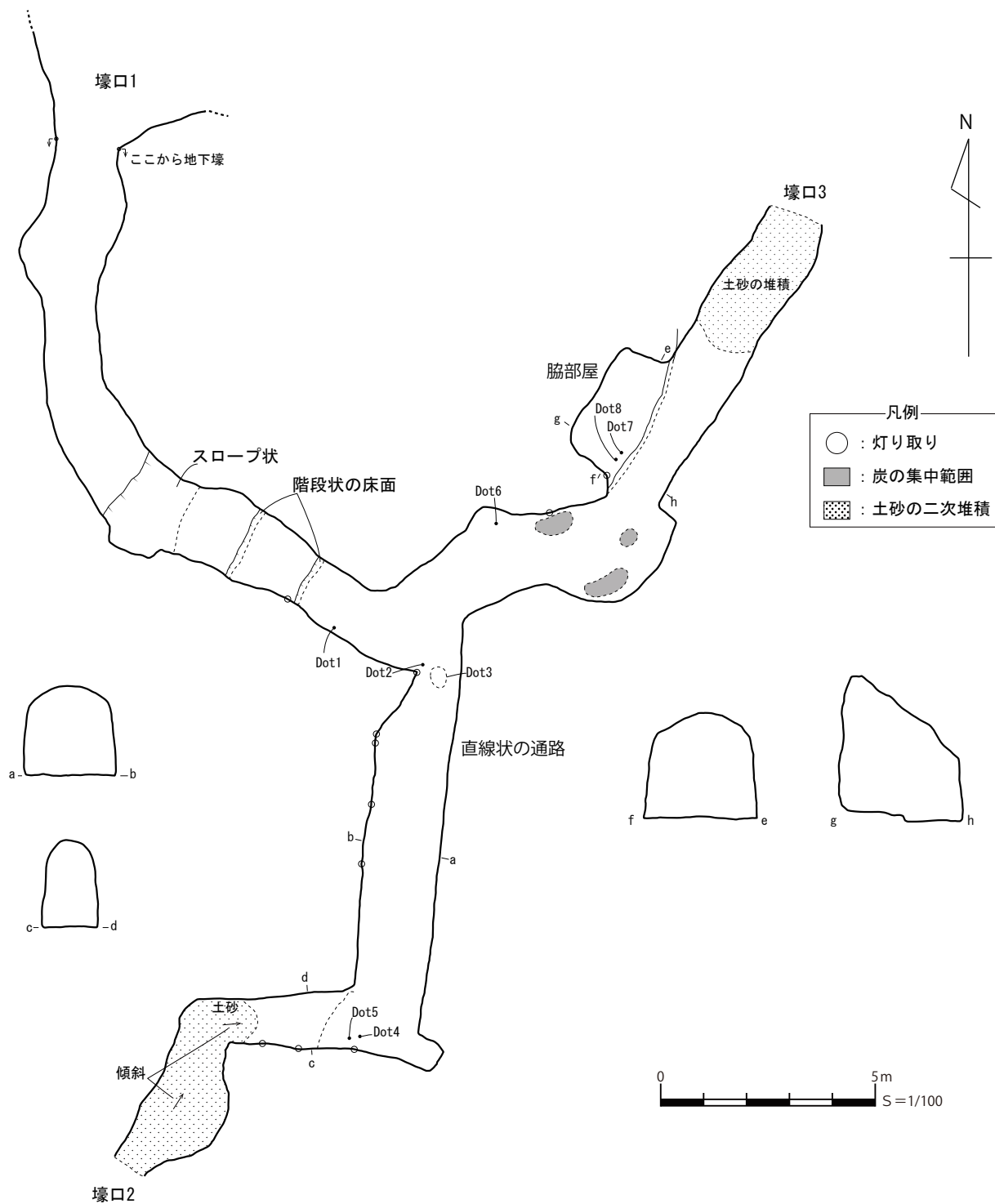
第1節 壕1

1, 壕の形態

壕1は、丘陵の中腹部分に位置し、4つの壕の中で最も規模の大きな壕である。壕口は全体で3つあり、2つは北を、もう1つは南南西に開口している。壕の全体的な平面形態は、Y字に近い形態を呈している。壕口1は、幅が約1.6mで外側に向かってハの字形に広がる形態を呈している。壕口1から南東方向に進む通路部分が、スロープ状に下る傾斜面をなし、部分的に階段状の約10cmほどの段差も設けられている。壕口3は、現在土砂でふさがれている。この壕口3から南西方向に進むと、西側に幅約3m、奥行き約1.4m、高さ2.5mの脇部屋が構築されている。この脇部屋と通路との境は約10cmほどの段差をもってあがっている。脇部屋からさらに南西方向に進むとやや幅の広い部分にいたり、その場所では床面に多くの炭化材を確認することができ、大きく3つの単位での認識が可能である。この場所で、何らかの火を使用する行為を行っていたと考えられるが、その用途については判然としない。本壕の大きな特徴としては、壕1と壕3からの通路が交わり南へ向かう直進の通路の構築が非常に丁寧であることがあげられる。本通路部分は、床面は非常にフラットに仕上げられており、壕の断面形は逆U字型を呈する。壁面には灯り取りのための台座を石灰岩を掘り込んで構築し、壁面には煤が天井部分まで帯状に延びている。壕口2も、土砂の堆積によってふさがれている。この壕口2の入口近くでも複数の灯り取りを確認することができた。



第14図 国仲美里の壕の位置図



第15図 壕1平面図・断面図 (S=1/10)



写真 40 壕 1・壕口 1 近景



写真 41 壕 1・壕口 2 を内部より望む



写真 42 壕 1・壕内の直線上の通路



写真 43 壕 1・直線上の通路の壁面に残る灯り取りの煤跡



写真 44 壕 1・壕口 3 を望む。左側には脇部屋を有する。



写真 45 壕 1・階段状の床面



写真 46 灯り取りの台座



写真 47 壕 1・石積部分



写真 48 壕 1・炭の集中部分

2. 遺物

壕1からは、全体で8点の遺物が出土している。その内5点は、類似した形態をなした缶詰と想定され、用途不明の楕円柱の製品1点、沖縄産施釉陶器1点、戦後の遺物と考えられるプラスチック製の蓋が1点出土している。缶詰の中には、灯り取りとして2次利用されているものもみられた。缶詰は、他の戦争遺跡からも多く出土する遺物であり、灯り取りへの2次利用も度々みられるものである。



写真 49 壕1出土遺物集合

遺物の取り上げについては、Dot No.付して取り上げを行った。一か所に遺物が集中する出土状況ではなく、壕内の散布するようにして出土している。

Dot1は、円柱の形態をなし、缶詰と推察される。全体的に2次的な作用によって凹んだ形状を呈すが、底面のみが部分的に本来の形状を残す。底面の直径は、7.4 mmで、器高は約11.3 mmほどである。表面は、錆の形成が進むとともに、石灰の付着が多くみられる。

Dot2は、楕円柱の形態をなし、上面、下面とも底の部分が残る。しかし、その一端の底面には、直径9 mmの円形の孔が穿たれている。上面、下面の楕円の形状は、長軸が5.8 cm、短軸が3.1 cmを測る。器高は、9.2 cmである。2つの側面の中心部は、直径4.0 cmの円形に凹んで整形されている。器面は、表面の錆が進んでいる。

Dot3は、沖縄産施釉陶器の灰釉碗である。胴部の一部を欠くが、口縁部から底部までが残る。口径は13.1 cm、底面は6.2 cm、器高は、6.1 cmである。内面は、内底部を中心に炭が多付着する。フィガキによる施釉方法がとられ、胴下半部は露胎する、器面には、一部石灰が付着する。

Dot4は、円柱の形態をなし、缶詰と推察される。上面は変形しているが、底面は直径7.6 cmを測り、器高さは11.8 cmである。表面は、錆の形成が進み、石灰の付着もみられるが、内面は錆や石灰の付着はほとんどみられない。

Dot5は、缶詰を2次利用した灯り取りである。本来は円柱の形態であるが、上面、底面とも横位につぶされた形状をなす。そのため、上面、底面の直径を計測することは困難であるが、概ね7～8 cmを測るものと推察される。器高は、11.3 cmである。側面下半部に、18の孔が穿孔されている。孔の形態は、四角形を呈し、一辺は3～5 mmをなす。底面は、破損する。この缶詰とともに、一端を円形に折り曲げ、もう一端をJの字状に折り曲げた針金が出土している。これは、缶詰を2次利用した灯り取りを吊るすための部位と考えられる。基部の長さは約14 cmで、針金の直径は4 mmである。いずれの製品も、表面の錆の形成が進んでいる。

Dot6は、プラスチック製の蓋である。戦後の遺物と考えられる。

Dot7は、円柱の形態を呈す缶詰と推察される。底面部付近のみが残り、その大部分が破損する。底面の直径は7.8 cmである。器面は、他の同様の製品に比して錆は形成されていない。

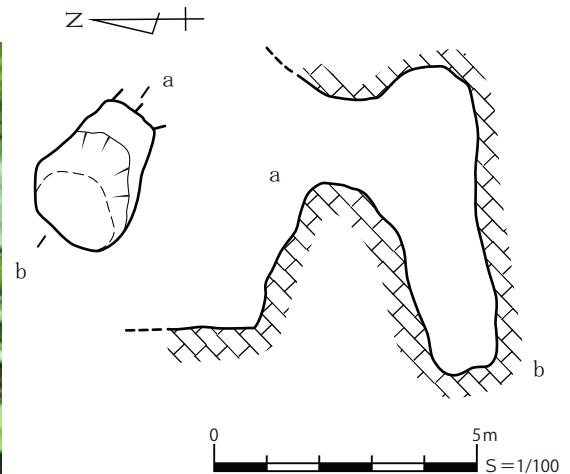
Dot8は、円柱の形態を呈す缶詰である。底面の直径は約7.7 cmを測り、上部は破損するため、器高は不明である。底面も部分的に破損し、一部は内側から外側へ折り曲げている。

第2節 壕2

壕2は、丘陵の中腹部あたりに位置し、現在の地表面より約2.1mほど岩盤を上がった場所に、壕口が確認できる。壕口は、北へ開口し、幅は約0.7m、高さ約1.2mほどと狭い。この壕口をはいるとすぐに、地下へ約2.7m下るよに壕が構築されている。下りの傾斜角は非常にきつい。壕内の底部から天井部までの高さは約4.1mにも達する。壕は、人為的に構築されたと考えられるが、灯りとりや缶などの遺物は確認されなかった。



写真50 壕2・壕口部分



第16図 壕2平面図・断面図 (S=1/10)



写真51 壕2・壕口（壕内部より）



写真52 壕2・壕内部

第3節 壕3

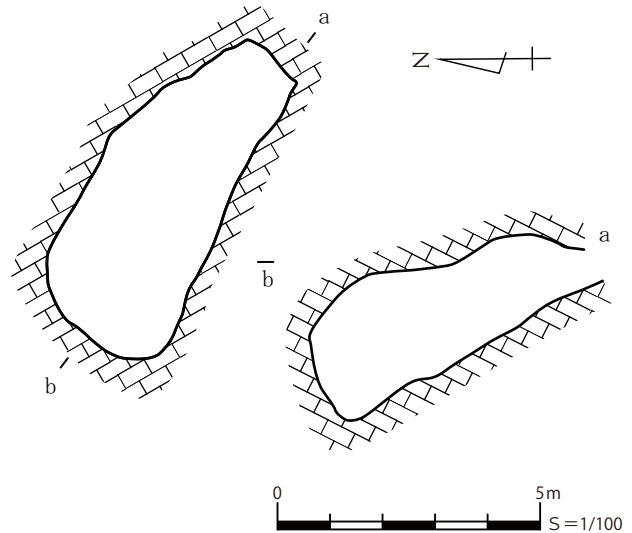
壕3は、壕口の幅が1.2m、高さ0.5mと比較的狭く、現在の地表面から地下へ下るように壕が掘り込まれている。現在の地表面からの高低差は、約1.5mである。壕内の最大幅は約2.0m、高さ約1.6mと壕口に比して広い形状を呈する。壕内に明瞭な人為的な掘削の痕跡は確認されないことから、ほぼ自然の洞穴を利用した壕といえる。



写真53 壕3・壕口部分



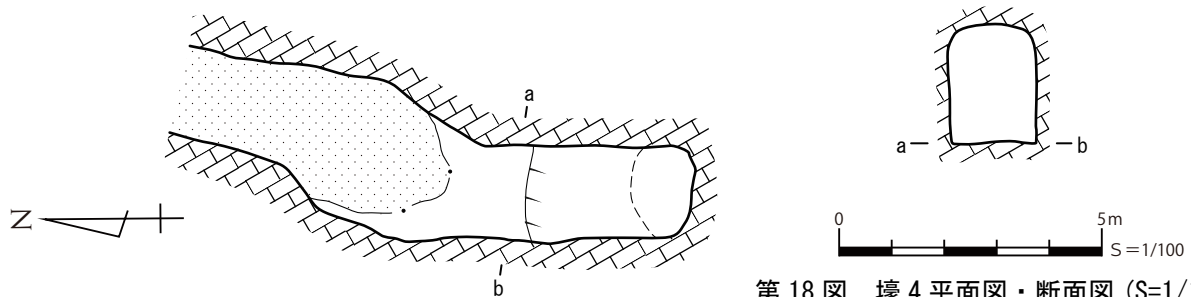
写真 54 壕 3・壕内部



第 17 図 壕 3 平面図・断面図 (S=1/100)

第 4 節 壕 4

壕 4 も、現在の地表面から地下へ下るように構築された壕である。壕口は北を向いて開口し、幅は約 1.0m、高さ約 1.15m である。壕の内部は比較的丁寧に構築されており、床は平坦な形状を呈する。また、壕の断面形態も隅丸の方形型を呈し、高いところでは約 1.9m にも達する。壕内部には、壁面を部分的に掘り込んで平坦目を形成した灯り通りの台座が 1 つ確認されている。台座に規格は、幅 0.45m、縦 0.21m、高さ 0.45m を呈し、煤が約 1m の高さの部分にまで達している。その他、壕内の最奥部で缶が 1 点確認された。



第 18 図 壕 4 平面図・断面図 (S=1/100)



写真 55 壕 4・壕口部分



写真 56 壕 4・壕内部

第5章 まとめ

1. 国仲元島遺跡

国仲元島遺跡は、沖縄県教育委員会による分布調査で確認されている周知の埋蔵文化財であったが、今回の発掘調査に伴う事前の試掘調査によってその遺跡の範囲が拡大することが確認された。

発掘調査はA地区、B地区の2つの調査区を設けて実施した。基本層序は、Ⅰ層を表土及び耕作土とし、その下にグスク時代の遺物包含層であるⅡ層が堆積し、地山のⅢ層のマージ層、基盤の琉球石灰岩へ至る。A・B両地区ともに調査前には畑地として利用されていたため、大部分が地山層まで攪乱が及んでいたが、B地区の北側部分ではⅡ層としたグスク時代の遺物包含層がよく残されていた。遺構は、B地区北側において20 cm大の石灰岩礫を積み上げた石積遺構が確認された。石積遺構は、Ⅱ層のグスク時代に位置づけられる遺構であり、石積内からも土器、青磁、褐釉陶器、貝類などの多くの遺物が出土している。石積は最も高い所で約60 cmに達していたが、検出範囲が限られていたため、その全体層が確認できず、その用途や機能についても判然としない。出土遺物としては、Ⅱ層より白磁、青磁、中国産褐釉陶器、黒釉陶器などが出土しており、概ねグスク時代に位置づけられる。年代観としては、今帰仁タイプ白磁碗などが13世紀後半を示すものの、青磁の玉縁口縁碗などが主体となり、青花の出土状況などからも15世紀中頃から16世紀前半が中心年代になるものと考えられる。また、近世時の遺物が非常に少ないことから、16世紀以降に、今回調査を行った地域が集落として機能していた可能性は非常に少ない。このことから、国仲元島遺跡は、グスク時代の13世紀の後半ごろから集落としての形成が開始したと考えられるが、15世紀中頃から16世紀前半に中心的な活動時期を有し、近世時には集落としてほとんど衰退しているという非常に活動時期が限定される遺跡であるといえる。

2. 国仲美里の壕

国仲美里の壕は、全体で4基の壕から構成される。4基内の3基（壕②～④）は、非常に小規模な壕であり、自然の岩陰の空洞を利用して構築している。そのため、これら3基の壕については、緊急避難時の退避を目的とした壕と推察される。もう1つの壕である壕①は、これら3つの壕に比して非常に大規模で、構築過程も丁寧であるといえる。また、壕内部からは、缶や灯りとりなどが確認されている。このような壕の形態や遺物の出土状況から、国仲美里の壕が旧日本軍によって構築され、使用されていたことは明らかである。しかし、その用途、機能について、これらの状況から判断することは困難である。

国仲美里の壕に近接する国仲砂川の壕は、榴弾砲を格納していた壕であることが推察されている。また、歴史史料や聞き取り調査の結果から、国仲美里の壕、国仲砂川の壕の位置する一帯には、独立混成第59旅団が駐屯していたとされることから、国仲美里の壕も独立混成第59旅団に関連する壕であったと考えられる。

報 告 書 抄 録

ふりがな	くになかもとじまいせき・くになかみさとのごう
書名	国仲元島遺跡・国仲美里の壕
副書名	仲地副貯水池整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	－
シリーズ名	宮古島市文化財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	久貝弥嗣・山口直美
編集機関	宮古島市教育委員会
所在地	〒906－0103 沖縄県宮古島市城辺字福里600－1番地
発行年月日	2018(平成30)年3月6日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	調査原因
収録遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′ ″	° / ′ ″			
国仲元島遺跡	宮古島市伊良部字国仲美里369-3、369-4	-	-	24° 49′ 44″	125° 10′ 45″	発掘調査：平成29年1月18日～3月24日	400㎡	記録保存調査
国仲美里の壕	宮古島市伊良部字国仲美里397-1、397-36	-	-			資料整理・報告書作成：平成29年8月18日～平成30年3月7日	4カ所	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
国仲元島遺跡	集落	グスク時代	石積遺構	青磁、白磁、中国産褐釉陶器、土器、貝類遺体、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器等	15世紀～16世紀を中心年代とした集落遺跡
国仲美里の壕	戦争遺跡	太平洋戦争時	旧日本軍構築の壕	缶、灯り取り等	独立混成第59旅団に関連する戦争遺跡と考えられる

宮古島市文化財調査報告書第 12 集

国仲元島遺跡・国仲美里の壕

－ 仲地副貯水池整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 －

発 行 年： 平成 30(2018) 年 3 月

発行・編集： 宮古島市教育委員会

〒 906-0103 沖縄県宮古島市城辺字福里 600-1

TEL : 0980-77-4947 FAX : 0980-77-4957

印 刷： シモジ印刷
